

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第113集

狝森古墳群遺跡発掘調査報告書

国道4号拡幅工事関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

狹森古墳群遺跡発掘調査報告書

国道4号拡幅工事関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,000以上に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化財を保護し、保存していくことは、県民に課せられた重大な責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう交通網の整備と重要な一施策であります。本県を縦断する一般国道4号の拡幅と産業経済発展の大動脈として多方面からの期待を担うものであります。

当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業に伴って止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を実施し記録保存の措置をとってまいりました。

本報告書は、一般国道4号の矢巾地区拡幅工事に関連して、昭和60年度に発掘調査を実施した伏森古墳群遺跡の調査結果をまとめたものであります。今回の調査によって古墳15基の周流をはじめ、墓塚、竪穴住居跡等が発見されました。また、勾玉、切子玉、直刀等奈良時代から平安時代にかけての遺物が出土しており、古墳の分布がさらに段丘の南西に続くことも明らかになりました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御援助、御協力を賜りました建設省東北地方建設局岩手工事事務所、矢巾町、矢巾町教育委員会をはじめ、関係各位に心から感謝申し上げます。

昭和61年10月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 中村直

例 言

1. 本報告書は、岩手県紫波郡矢巾町藤沢第7地割字伏森58-2ほかに所在する伏森古墳群遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の調査は国道4号の拡幅工事に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は建設省岩手工事事務所と岩手県教育委員会事務局文化課との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 本遺跡の岩手県遺跡登録台帳の遺跡番号はLE47-0183、調査略号はEM-85である。
4. 発掘調査は昭和60年8月19日から10月31日まで行った。
室内の整理作業は昭和60年11月1日から昭和61年1月15日まで行った。
5. 発掘調査及び報告書作成は菊池利和、光井文行が担当した。
6. 調査対象面積は2,200㎡、調査面積は1,500㎡である。
7. 鑑定は次の方々、機関に依頼した。
石質鑑定 佐藤地質工学研究所 佐藤 二郎氏
炭化材樹種鑑定 岩手県木炭協会 早坂松次郎氏
8. 本報告書の執筆、編集、校正は光井文行が行った。
9. 発掘調査は川原正造氏をはじめとする地元の方々の協力を得た。また、室内整理作業には臨時職員の協力を得た。
10. 調査によって得られた資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

目 次

序

例言

I 調査に至る経過	3	2. 古墳周禮	19
II 調査方法と整理方法	3	3. 土坑・土塋	40
III 遺跡の立地と環境	6	4. 溝跡	52
IV 検出遺構と遺物	13	V 遺構外の出土遺物	72
1. 竪穴住居跡	13	VI まとめ	81

付編

秩森古墳群遺跡出土の火山灰の蛍光X線分析	85
秩森古墳群遺跡出土直刀の金属学的解析結果	86

挿 図 目 次

挿図1 スクリーントーン・記号・調整痕・法量の用例	5
挿図2 基本土層模式図	6

図 版 目 次

図版1 岩手渠全図	1	図版15 E I - 1号古墳周禮	26
図版2 遺跡位置図	2	図版16 B II - 1号古墳周禮	27
図版3 地形分類図	7	図版17 B II - 2号古墳周禮	29
図版4 遺構配置図(1)	9	図版18 B II - 3号古墳周禮	30
図版5 遺構配置図(2)	11	図版19 B II - 4号古墳周禮	31
図版6 F I - 1住居跡(1)	14	図版20 B II - 5号古墳周禮	32
図版7 F I - 1住居跡(2)	15	図版21 C II - 1号古墳周禮	33
図版8 F I - 2住居跡(1)	17	図版22 D II - 1号古墳周禮(1)	34
図版9 F I - 2住居跡(2)	18	図版23 D II - 1号古墳周禮(2)	35
図版10 B I - 1号古墳周禮	20	図版24 E II - 1号古墳周禮	37
図版11 D I - 1号古墳周禮	21	図版25 E II - 2号古墳周禮	38
図版12 D I - 2号古墳周禮	22	図版26 E II - 3号古墳周禮	39
図版13 D I - 3号古墳周禮(1)	24	図版27 E I - 51土坑	41
図版14 D I - 3号古墳周禮(2)	25	図版28 B II - 51土塋	42

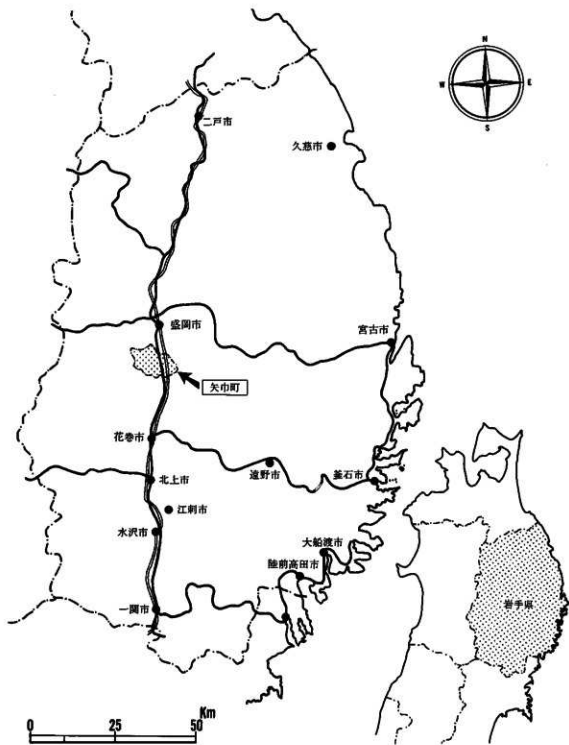
図版29	B II - 52土坑	43	図版45	B II - 104溝跡	63
図版30	B II - 53・54土坑	44	図版46	C II - 101溝跡(1)	64
図版31	D II - 51土坑	45	図版47	C II - 101溝跡(2)	65
図版32	E II - 51・52・54土坑	47	図版48	C II - 102溝跡	67
図版33	E II - 53土坑	48	図版49	D II - 101溝跡	68
図版34	B II - 55・56・60・61土坑・57・59土坑	49	図版50	E II - 101・102・103溝跡(1)	69
図版35	B I - 101・102溝跡(1)	53	図版51	E II - 101・102・103溝跡(2)	70
図版36	B I - 101・102溝跡(2) F I - 101溝跡	54	図版52	B II - 105・106溝跡	71
図版37	D I - 101溝跡	55	図版53	F I - 1住居跡出土遺物(1)	73
図版38	F I - 102溝跡(1)	56	図版54	F I - 1住居跡出土遺物(2)	74
図版39	F I - 102溝跡(2)	57	図版55	F I - 2住居跡出土遺物(1)	75
図版40	F I - 103溝跡	58	図版56	F I - 2住居跡出土遺物(2)	76
図版41	A II - 101・102溝跡	59	図版57	F I - 2住居跡出土遺物(3)	77
図版42	B II - 101溝跡	60	図版58	F I - 2住居跡出土遺物(4)	78
図版43	B II - 102溝跡	61	図版59	E II - 51土坑・遺構外出土遺物	79
図版44	B II - 103溝跡	62	図版60	出土遺物 古銭	80

写真図版目次

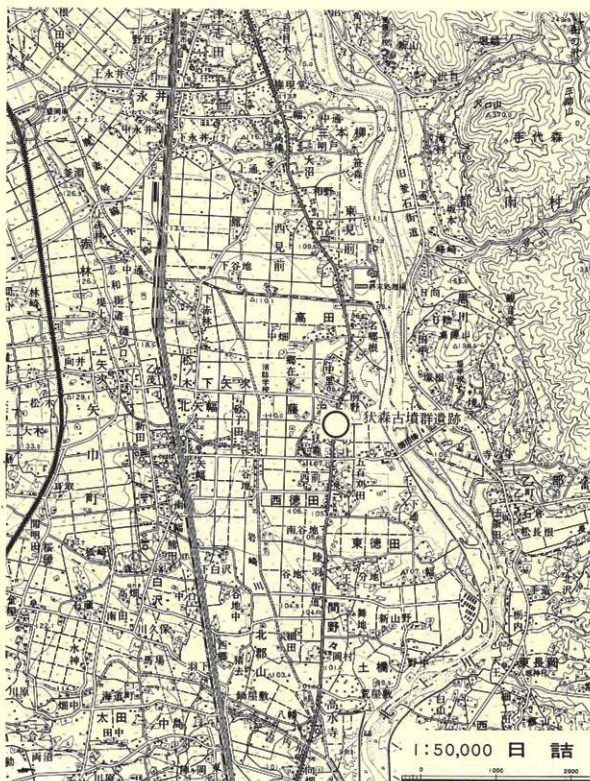
写真図版1	91	a. F I - 1住居跡(埋土断面No.1)	
a. 調査前の遺跡現況西側(B I区)		b. F I - 1住居跡(埋土断面No.2)	
b. 調査前の遺跡現況西側(D・E I区)		写真図版6	96
写真図版2	92	a. F I - 2住居跡(平面)	
a. 調査前の遺跡現況東側(C II区)		b. F I - 2住居跡(埋土断面No.2)	
b. 調査前の遺跡現況東側(D・E II区)		写真図版7	97
写真図版3	93	a. F I - 2住居跡カマド(平面)	
a. 粗瓶作業状況東側(B II区)		b. F I - 2住居跡カマド(埋土断面)	
b. 遺構検出作業状況東側(A・B II区)		c. F I - 2住居跡カマド(右袖断面)	
写真図版4	94	写真図版8	98
a. 東側No.2深掘(土層断面)		a. B I - 1号古墳(平面)	
b. 西側No.2深掘(土層断面)		b. B I - 1号古墳周濠(埋土断面No.2)	
c. 西側No.1深掘(土層断面)		写真図版9	99
写真図版5	95	a. D I - 1号古墳(平面)	

b. D I - 1号古墳周濠 (埋土断面No.1)	写真図版20.....	110
写真図版10.....	a. E II - 1号古墳 (平面)	
a. D I - 2号古墳 (平面)	b. E II - 1号古墳周濠 (埋土断面)	
b. D I - 2号古墳周濠 (埋土断面No.1)	写真図版21.....	111
写真図版11.....	a. E II - 2号古墳 (平面)	
a. D I - 3号古墳 (平面)	b. E II - 2号古墳周濠 (埋土断面)	
b. D I - 3号古墳周濠 (埋土断面No.2)	写真図版22.....	112
写真図版12.....	a. E II - 3号古墳 (平面)	
a. E I - 1号古墳 (平面)	b. E II - 3号古墳周濠 (埋土断面)	
b. E I - 1号古墳周濠 (埋土断面No.2)	写真図版23.....	113
写真図版13.....	a. E I - 51土坑 (平面)	
a. B II - 1号古墳 (平面)	b. E I - 51土坑 (埋土断面No.3)	
b. B II - 1号古墳周濠 (埋土断面No.2)	写真図版24.....	114
写真図版14.....	a. B II - 51土壘 (平面)	
a. B II - 2号古墳 (平面)	b. B II - 51土壘 (埋土断面No.1)	
b. B II - 2号古墳周濠 (埋土断面No.2)	写真図版25.....	115
写真図版15.....	a. B II - 52土坑 (平面)	
a. B II - 3号古墳 (平面)	b. B II - 52土坑 (埋土断面)	
b. B II - 3号古墳周濠 (埋土断面No.)	写真図版26.....	116
写真図版16.....	a. B II - 53土坑 (左)	
a. B II - 4号古墳 (平面)	B II - 54土坑 (右) (平面)	
b. B II - 4号古墳周濠 (埋土断面)	b. B II - 53土坑 (右)	
写真図版17.....	B II - 104溝跡 (左) (埋土断面)	
a. B II - 5号古墳 (平面)	写真図版27.....	117
b. B II - 5号古墳周濠 (埋土断面)	a. B II - 54土坑 (平面)	
写真図版18.....	b. B II - 54土坑 (埋土断面)	
a. C II - 1号古墳 (平面)	写真図版28.....	118
b. C II - 1号古墳周濠 (埋土断面No.)	a. D II - 51土坑 (平面)	
c. C II - 1号古墳周濠 (埋土断面No.)	b. D II - 51土坑 (埋土断面No.1)	
写真図版19.....	写真図版29.....	119
a. D II - 1号古墳 (平面)	a. E II - 51土壘 (平面)	
b. D II - 1号古墳周濠 (埋土断面)	b. E II - 51土壘 (埋土断面)	

写真図版30	120	写真図版40	130
a. E II-52・53土坑 (平面)		a. B II-102溝跡 (平面)	
b. E II-54土坑 (埋土断面)		b. B II-102溝跡 (埋土断面No.2)	
写真図版31	121	写真図版41	131
a. E II-53土坑 (平面)		a. B II-103溝跡 (平面)	
b. E II-53土坑 (埋土断面)		b. B II-103溝跡 (埋土断面)	
写真図版32	122	写真図版42	132
a. B I-104溝跡 (平面)		a. B II-104溝跡、B II-53土坑 (平面)	
b. B I-101溝跡 (埋土断面No.5)		b. B II-104溝跡 (埋土断面)	
c. B I-101溝跡 (埋土断面No.6)		写真図版43	133
写真図版33	123	a. C II-101溝跡 (平面)	
a. B I-102溝跡 (平面)		b. C II-101溝跡 (埋土断面No.1)	
b. B I-102溝跡 (埋土断面No.1)		写真図版44	134
c. B I-102溝跡 (埋土断面No.2)		c. C II-101溝跡 (埋土断面No.2)	
写真図版34	124	a. C II-102溝跡 (平面)	
a. D I-101溝跡 (平面)		写真図版45	135
b. D I-101溝跡 (埋土断面)		a. D II-101溝跡 (平面)	
写真図版35	125	b. D II-101溝跡 (埋土断面No.2)	
a. F I-101溝跡 (平面)		写真図版46	136
b. F I-101溝跡 (埋土断面)		a. E II-101、102溝跡 (平面)	
写真図版36	126	b. E II-101、102溝跡 (埋土断面)	
a. F I-102溝跡 (平面)		写真図版47	137
b. F I-102溝跡 (埋土断面No.4)		a. E II-103溝跡 (平面)	
写真図版37	127	b. E II-103溝跡 (埋土断面No.2)	
a. A II-101溝跡 (平面)		写真図版48	138
b. A II-101溝跡 (埋土断面No.1)		a. B II-106溝跡 (平面)	
写真図版38	128	b. B II-105溝跡 (平面)	
a. A II-102溝跡 (平面)		c. B II-55~59土坑 (平面)	
b. A II-102溝跡 (埋土断面)		写真図版49	139
写真図版39	1	a~c. B II-55・56・60・61土坑	
a. B II-101溝跡 (平面)		写真図版50~53	140
b. B II-101溝跡 (埋土断面No.2)		遺構内外出土遺物	



図版 1 岩手県全図



図版 2 遺跡位置図

I 調査に至る経過

国道4号の交通緩和を目的とした矢巾地区拡幅工事に関連する埋蔵文化財の取扱いについては、昭和57年から岩手県教育委員会文化課と建設省東北地方建設局岩手工事事務所の間で協議が行われた。

紫波郡矢巾町藤沢地内を含めた埋蔵文化財包蔵地の分布調査は、昭和57年10月25日付け陸東岩二工事第126号による依頼をうけた県教育委員会文化課が昭和58年4月25、26の両日遺跡分布調査を実施した。調査の結果、関連地域内には鳥遺跡、西田遺跡、徳丹城跡、狝森古墳群遺跡等9遺跡が確認され、昭和58年5月4日付け教文第97号により、「国道4号線矢巾拡幅事業に係る遺跡分布調査の結果について」として回答した。

狝森古墳群遺跡の発掘調査及び報告書作成については、昭和59年11月22日岩手県教育委員会、岩手県埋蔵文化財センター、建設省岩手工事事務所の三者による協議が行われ、昭和60年度における発掘調査、昭和61年度の報告書作成の方向が提示された。これをうけて県教育委員会文化課は、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターにおける昭和60年度発掘調査対象遺跡とし昭和60年度8月1日付け委託契約をうけた当埋蔵文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

II 調査方法と整理方法

1. 調査方法

〈グリッド設定〉

調査区域は国道4号線両側の幅7m、長さ300mの範囲である。基準点は幅杭2点を使用した。基準点の成果は次のとおりである

基準点1 T. 45 (X=-42885.268m Y=29396.827m)

基準点2 T. 45-1 (X=-42932.018m Y=29393.236m)

基準点1と基準点2を結ぶ直線を南北の基線とし、これと直交し基準点1を通る直線を東西の基線とした。この基線かや四方に50m×50m単位で調査区を大区画した。区画の名称は東西方向に西から、I、IIを、南北方向に北からA～Fを付して、A I区、B II区のように表わした。また、遺物取り上げのため、大区画に5m×5mの小区画を設け、北西隅から東に0～9を、南にa～jを付してA I a 0、B II b 3のように表わした。

〈粗堀・遺構検出〉

一部は手掘りを行い、そのほかは検出面までの深さを把握したのち、バックホーを使用して表土の除去を行った。検出された遺構の名称は大区画ごとに、整穴住居跡、古墳周濠は1から、

土坑、土壌は51から、溝跡は101からそれぞれ分類番号を与え、その前に大区画名を付して、BⅡ-1号古墳周溝、FⅠ-1住居跡、EⅡ-52土坑、AⅠ-102溝跡のように表わした。

〈精査〉

住居址は4分法、そのほかの遺構は2分法を原則としたが、遺構の重複、検出状況等に応じて使い分けた。遺物は小区画別に取り上げ、地点、層位を記録して収納した。遺構出土の遺物のうち、遺構に伴うものは可能な限り写真撮影後、出土地点、レベルを図面に記録した後、遺物番号を付けて取り上げた。

〈実測〉

遺構の平面図は原則として5mグリッドによる簡易遣り方を設定して実測した。実測図は縮尺20分の1で統一した。

〈写真撮影〉

6×7cm判カメラ（白黒用）1台、35mm判カメラ（白黒用、カラースライド用）2台を使用した。

2. 整理方法

現場から得られた資料の整理は作業計画に基づいて次のように行った。

〈図面〉

図面は第1原図の仕分けを遺構別に行い、点検、修正を加え、トレース、図版作成を調査員の指示のもとに室内作業員が行った。

〈遺物〉

遺物は注記後、登録、接合、復元、写真撮影、拓本、実測、トレース、図版作成を順次室内作業員が行った。主な点検・指示はその都度、調査員が行った。

〈写真〉

写真は35mm版白黒・カラースライド、6×7cm版白黒写真別にアルバムへ収納し、写真登録カードを作成した。

〈縮尺〉

遺構図版の縮尺は40分の1を原則としたが、遺構の大きい場合は、一部不定縮尺とし、それぞれにスケールを付した。遺物図版の縮尺は種類、大きさに応じて原寸、2分の1、3分の1とし、それぞれに縮尺を明示した。写真図版の縮尺は不定である。

〈記号・スクリーン・トーン〉

図版に使用した記号・スクリーン・トーン・調整痕・法量等は次の用例に示したとおりである。



池山



焼土



調査区域外



土器



礎



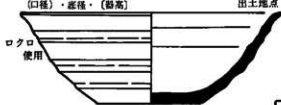
磁北

* v ()は推定、単位cm

* s ()は残存高

* (口径)・底径・(器高)

出土地点



須恵器

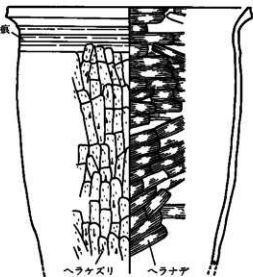
ロクロ痕

反転実測

内面黒色処理



土師器



ヘラケズリ

ヘラナデ

神図1 スクリーントーン・記号・調整痕・法量の用例

Ⅲ 遺跡の立地と環境

伏森古墳群遺跡は盛岡市の南約10kmにある矢巾町の北部にあたり、国鉄矢巾駅の東約2kmに位置している。本遺跡を国道4線が縦断している。東側は朝島山（標高607m）を中心とする北上山地の西縁部があり、西側には東根山（標高928m）を中心とする標高500m以上の山々が連なる奥羽山脈がある。中央部には南北にのびる北上川河谷平野があり、北上川はその東縁を南流している。

1. 地形、地質

伏森古墳群遺跡が所在する北上川中流域北部は中川久夫氏ら(1963)によって、石鳥谷段丘(高位段丘)、二枚橋段丘(中位段丘)、花巻段丘、飯岡野段丘、都南段丘(以上低位段丘)に分けられている。

石鳥谷段丘は日詰付近に残片的に発達しているほか陣ヶ岡にもみられる。頂面は開折が進んでなだらかである。上部に1m以上の黄橙色～黄褐色火山灰層をのせ、下位に赤色風化したクサリ礫層が堆積している。

二枚橋段丘は石鳥谷段丘の外縁にへばりつく形で分布している。構成層は主に砂礫層からなり、2m内外の黄橙～黄褐色火山灰層に覆われている。

花巻段丘は滝名川、岩崎川などによって形成された複合扇状地として広く分布し、原面がよく保存されている。構成層は新鮮な礫からなり、面上には黄褐色火山灰層をのせない。

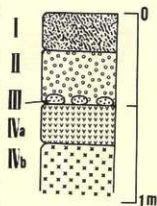
飯岡野段丘は西側の後背山地に沿う山麓状地面に発達している。

都南段丘は花巻段丘の上部を浸食して形成された段丘で、北上川流域付近、花巻段丘の外縁部に発達している。北へ進むほど沖積面との比高が不明瞭になる。

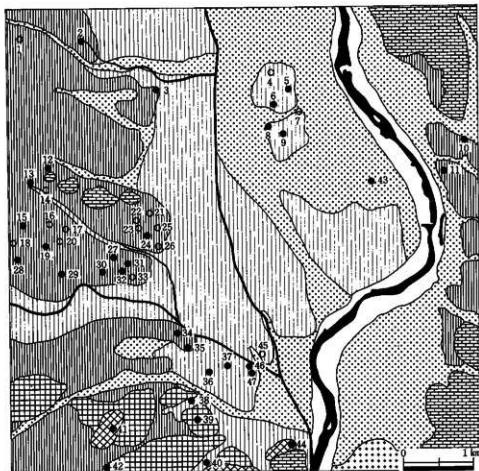
五代川、岩崎川などの下流域にみられる。構成層は新鮮な礫を主として上部に砂、シルト及び粘土を伴っている。

伏森古墳群遺跡は都南段丘上に立地し、西1kmに岩崎川、東0.7kmに北上川が南流している。本遺跡の載る段丘北端部は宅地のほか、畑地、果樹園として利用されている。遺跡の北側、東側には沖積地が広がり田地になっている。沖積面との比高は2～3mである。

本遺跡における基本土層は次のとおりになる。Ⅰ層は暗褐色シルト層(層厚20cm)の旧表土でこの上に40～60cmの厚さで盛土されている。Ⅱ層は黒褐色シルト層(層厚20～30cm)で硬くしまっている。下位は上位より明色である。Ⅲ層はにぶい黄橙色細粒浮



押図2 基本土層模式図



奈良・平安時代の遺跡

- | | | | | |
|------------|-------------|------------|------------|-----------|
| 1. 榎山Ⅰ遺跡 | 11. 乙部方八丁跡 | 21. 白沢Ⅲ遺跡 | 31. 白沢Ⅳ遺跡 | ○奈良時代 |
| 2. 上矢次Ⅰ遺跡 | 12. 細屋遺跡 | 22. 白沢Ⅳ遺跡 | 32. 白沢Ⅴ遺跡 | 41. 陣ヶ岡遺跡 |
| 3. 南矢幅遺跡 | 13. 下榎山遺跡 | 23. 白沢Ⅴ遺跡 | 33. 白沢Ⅵ遺跡 | 42. 柳原遺跡 |
| 4. 伏森古墳群遺跡 | 14. 榎山遺跡 | 24. 白沢Ⅵ遺跡 | 34. 古館橋遺跡 | 43. 泮州遺跡 |
| 5. 白山堂遺跡 | 15. 榎山Ⅲ遺跡 | 25. 白沢Ⅶ遺跡 | 35. 古館駅前遺跡 | 44. 御堂街遺跡 |
| 6. 田柳遺跡 | 16. 白沢Ⅷ遺跡 | 26. えぞ森古墳 | 36. 念仏堂遺跡 | 45. 稲村遺跡 |
| 7. 館畑遺跡 | 17. 白沢Ⅷ遺跡 | 27. 白沢Ⅷ遺跡 | 37. 中田Ⅰ遺跡 | 46. 中田遺跡 |
| 8. 西前遺跡 | 18. 白沢えぞ森古墳 | 28. 室岡遺跡 | 38. 杉ノ上Ⅰ遺跡 | 47. 古屋敷遺跡 |
| 9. 徳丹城跡 | 19. 石蔵遺跡 | 29. 太田遺跡 | 39. 新田遺跡 | |
| 10. 松長根遺跡 | 20. 白沢Ⅰ遺跡 | 30. 不動馬場遺跡 | 40. 杉ノ上Ⅱ遺跡 | |

「稲村・中田・古屋敷遺跡」の地形分類図から転載

図版3 地形分類図

石層（層厚0.5～1cm）で、三述利一氏の鑑定によると十和田a降下火山灰であるという。古墳周縁の埋土上部にみられる。遺構外では観察されていない。IV a層は暗褐色シルト層（層厚20～30cm）で下位に風化土をもつ。IV b層は褐色～よい黄橙色シルト層（層厚40cm）である。遺構検出面はIV a・IV b層上面である。

2. 周辺の遺跡

周辺の古代遺跡は『埋蔵文化財地図』（1974・岩手県教育委員会）や発掘調査報告書等によると、奈良時代14箇所、平安時代29箇所、奈良・平安時代の複合遺跡4箇所である。これらの大半は低位段丘である花巻、都南段丘上に立地している。

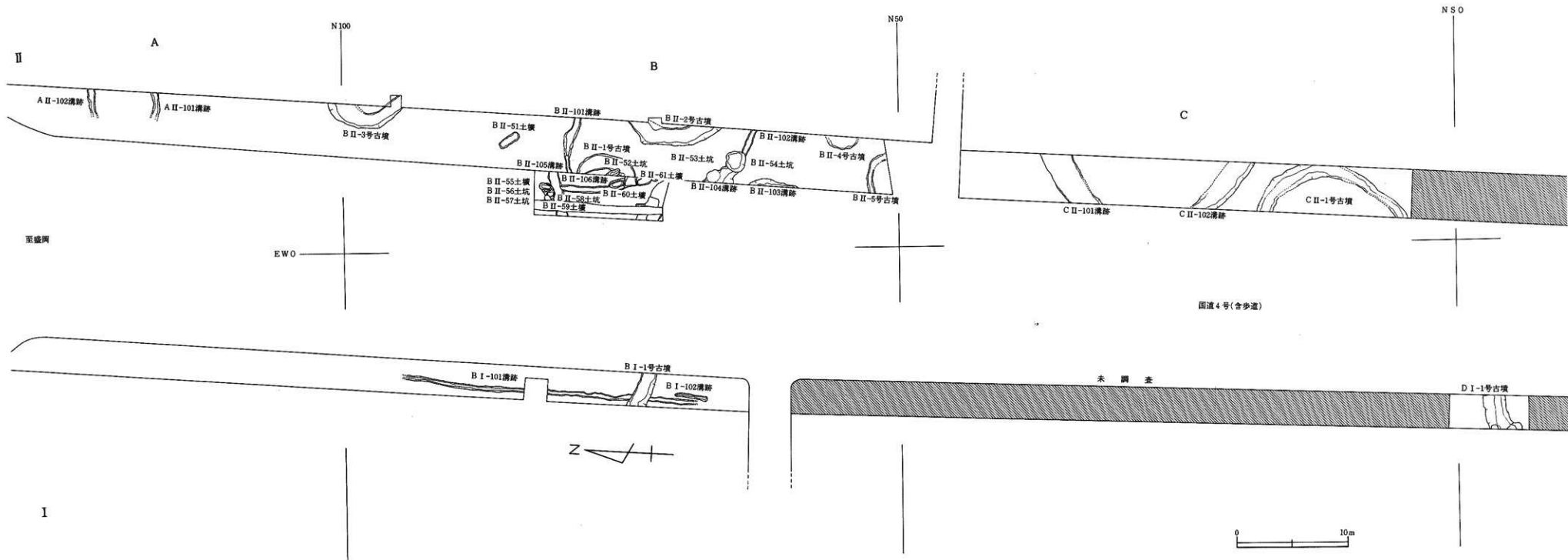
発掘調査が行われ、奈良時代の竪穴住居跡が検出されている遺跡は、稲村遺跡に3棟、渋川遺跡に37棟などである。徳丹城跡内からも竪穴住居跡が多く検出されている。稲村遺跡の竪穴住居跡は奈良時代後半に位置づけられている。渋川遺跡の竪穴住居跡は奈良時代前半のものが後半のものより多いという。

平安時代の竪穴住居跡が検出されている遺跡は、古館駅前遺跡、2棟（平安前半）、古館橋遺跡、1棟（平安前半）、杉ノ上Ⅰ遺跡、1棟（平安後半）、杉ノ上Ⅱ遺跡、3棟（平安前半）杉ノ上Ⅲ遺跡、5棟（平安前半(4)・後半(1)）、田頭遺跡、5棟（平安前半）、白沢遺跡、2棟（平安前半）、中田遺跡、7棟（平安前半）、古屋敷遺跡、8棟（平安前半）、渋川遺跡、29棟（平安前半が大半）、徳丹城跡などがある。

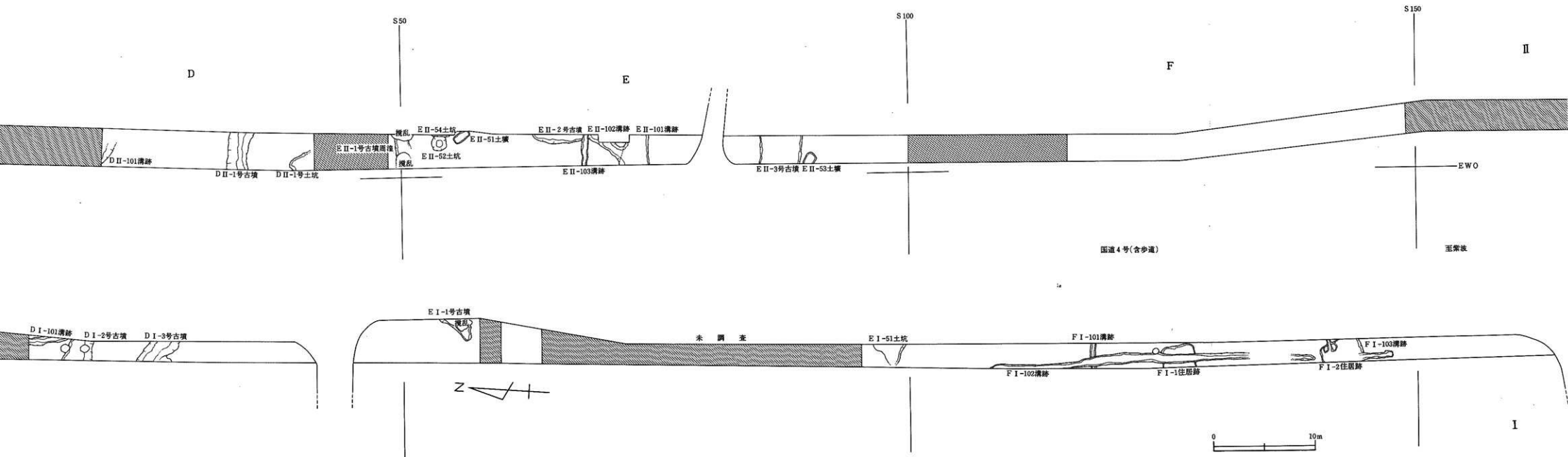
創建813年の徳丹城跡は本遺跡の南約0.7kmに所在している。

【参考引用文献】

- 鈴木隆英・佐々木勝・細谷英男・菅原弘太郎 1979 「杉ノ上Ⅰ遺跡」・「杉ノ上Ⅱ遺跡」・「杉ノ上Ⅲ遺跡」・「古館駅前遺跡」・「古館橋遺跡」・「田頭遺跡」・「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」
- 朴沢正耕 1980 「白沢遺跡」『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』
- 高橋文夫 1977 「地形・地質」『都南村湯沢遺跡』
- 中川久夫・岩井淳一・大池昭二・小野寺信吾・森由紀子・木下尚・竹内貞子・石田琢二 1963 「北上川中流沿岸の第四系および地形」『地学雑誌』第69巻第812号
- 高橋義介・三浦謙一・光井文行 1981 「稲村遺跡」・「中田遺跡」・「古屋敷遺跡」『岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第19集』
- 岩手県企画開発室 1975 「日誌」『北上山系開発地域 土地分類基本調査』



図版4 遺構配置図(1)



图版5 遺構配置圖(2)

IV. 検出遺構と遺物

1. 竪穴住居跡

FI-1住居跡

遺構 (図版6・7、写真図版5)

本遺構は調査区南端に位置し、西側半分が調査区域外にある。地表面から約60cm下の褐色シルト層上面で検出され、南北に走る幅60～90cm、深さ10cm前後のFI-102溝によって、床面と壁が破壊されている。

住居跡は東壁の長さが3.1m、検出されている部分の北壁、南壁の長さが、1.8mと2.2mである。検出された壁の輪郭線から、住居址は隅丸方形を呈しているものと推定される。壁高は北壁で最大10cm、東壁中央部で7cm、南壁で最大12cmである。

埋土は褐色シルトの小ブロック及び焼土粒の混入する黒褐色シルトが主体を占める。床面は平坦でしまりがあり、貼り床は施されていない。主柱穴、周溝は検出されていない。柱穴状ピットP₁ (径21cm、深さ20cm) が西側中央に1個検出されている。

北東隅寄りの北壁際と南東隅寄りには現地性焼土が検出されている。北東隅寄りの焼土は溝によって上部と西側の一部が削られている。残存する部分は規模が34cm×40cmで、厚さが11cmである。南東隅寄りの焼土は規模が34cm×26cm、厚さが11cmである。この現地性焼土の周りには異地性焼土が南北に長く76cm×48cmの規模で不整形に広がっていた。いずれも、その位置などから、カマド焼部または、その下底部と推定され、カマドのつくり替えがあったと考えられる。カマドの位置は北東隅寄りのものが北壁中央部東寄り、南東隅寄りのものが東壁または南壁の南東隅寄りと推定される。カマドの1つが下底部近くまで破壊されていることやカマドの残存状態が悪いことから、2つのカマドの新旧関係は不明である。

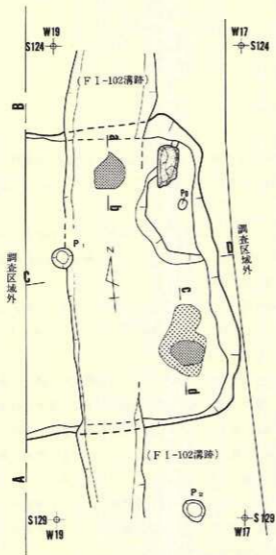
南壁の南1mに径23cm、深さ46cmのピットP₂が検出されている。南東隅に位置する焼土の真南にあり、位置、規模、形態から煙出口とも考えられるが、ピットの埋土や壁面の観察からでは煙出口と断定することができなかった。

東壁の北東隅寄りに、床面から5～12cm高く長軸径62cmの半円状をなす段が壁に接した形で検出されている。位置、規模、形態から推定して、出入口口の施設と考えられる。

出土遺物 (図版52・53、写真図版50)

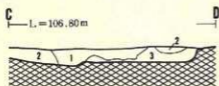
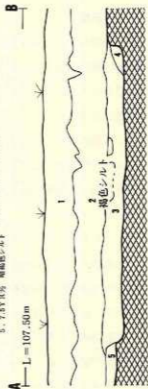
土師器

坏形土器 4点出土している。1は体部が外傾し口縁部がやや内湾している。器面にロクロ痕が多くあり大小の凹凸がある。底部は欠損している。内面は縦または横方向のヘラミガキ後、



(A-B)

1. 2.5Y 黒褐色シルト
2. 7.5Y 黒外 黒褐色シルト
3. 7.5Y 黒外 灰化土、礫土、灰褐色シルトのブロックを含む
4. 7.5Y 黒外 黒褐色シルト
5. 7.5Y 黒外 黒褐色シルト

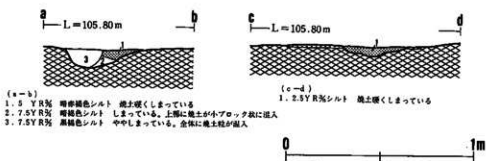


(C-D)

1. 7.5Y R 外 黒褐色シルト
2. 7.5Y R 外 黒褐色シルト
3. 10 Y R 外 黒褐色シルト



図版6 FI-1住居跡(1)



図版7 FI-1住居跡(2)

黒色処理が施されている。反転実測による口径は21cmと推定される。2～4は底部片で、ロクロからの切り離しが回転米切りである。底部外面に再調整はみられない。3点とも、内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。出土地点は1がピット底面直上、2・3が埋土下部、4が床面直上である。

甕形土器 5点出土している。5～7は体部下半が欠損している。ともにロクロ使用で、口縁部が短く外傾し、口唇部が直立または内傾している。5は外面が一部ヘラケズリによって再調整されている。7は口径13.7cmと推定され小型である。8・9は底部片で、外面がヘラケズリ、内面がナデで調整されている。出土地点は5・8・9が埋土、6がピット埋土、7が床面直上である。

須臾器

坏形土器 5点出土している。すべてロクロ使用のものである。12・13は底部が、14は口縁部が欠損している。ロクロからの切り離しは11・14が回転米切り、10が不明である。10は非常に摩耗しているため調整痕があまり残っていないが、ヘラケズリ再調整と推定されるものが、底部外面にみられる。出土地点は13が床面直上、10～12・14が埋土下部である。以上は酸化焙焼成の須臾器である。

坏形土器 15は体部片である。外面はロクロ痕が顕著である。床面直上から出土している。

壺形土器 19は肩部片である。外面は上半がロクロ、下半がヘラケズリで調整されている。20は体部片である。外面上半には横方向のカキメ痕がみられる。21は底部片である。外面はヘラケズリ、内面はハケメで調整されている。16～18は壺形土器の破片であると思われるものである。17・18は外面がロクロ調整後、一部ヘラケズリで再調整されている。出土地点は16・18・21が床面直上、17・19・20が埋土である。

F I - 2 住居跡

遺構 (図版8・9、写真図版6)

本遺構は調査区南端にあり、F I - 1 住居跡の南13mに位置し、西側半分と南東隅は調査区域外にある。検出面は地表面から55~60cm下の褐色シルト層上面である。南壁の一部は南北に走る幅70~80cm、深さ20~25cmのF I - 103 溝によって切られている。

検出されている壁の輪郭線から、住居址は角がやや丸味を帯びた方形を呈していると推定される。住居址の南北径は4.15mである。検出されている部分の壁の長さは北壁が1.5m、東壁が2.1m、南壁が2.2mである。壁高は北壁で最大15cm、東壁で最大33cm、南壁で最大29cmを測る。

埋土は上半部がにぶい黄褐色シルトのブロックが混じる黒褐色の粘土質シルト、下半部がにぶい褐色・樹色の粘土質シルトのブロックが混じり、壁際では炭化物、焼土粒を多く含む黒褐色シルトで主に構成されている。

床面は大小の凹凸があるが、全体として平坦である。貼り床は施されていない。柱穴、周溝は検出されていない。

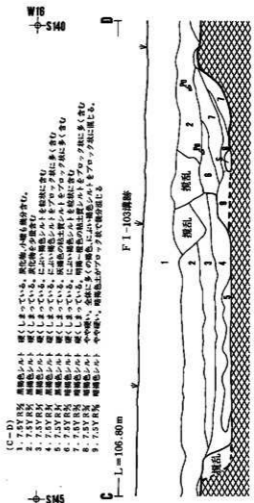
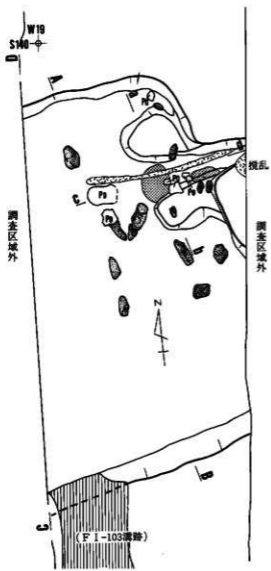
カマドは東壁中央部北寄りに設けられている。カマド本体は崩壊し、袖下半部が僅かに原位を保っている。袖は長軸径20~31cmの細長い川原礫を数個、内傾させて埋め込み、褐色粘土質シルトのブロックが全体に混じる暗褐色粘土質シルトでまいてつくられている。燃烧部は径約40cmの浅皿状を呈している。焼土の厚さは最大で6cmである。煙出口と煙道の一部は調査区外にあり、検出された部分の煙道の長さは42cmである。煙道の一部に土師器の甕形土器(底部なし)が利用され、煙道は燃烧部から緩やかに立ち上がっている。

出土遺物 (図版54~57、写真図版51・52)

土師器

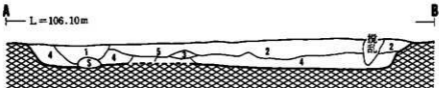
坏形土器 10点出土している。22・27は底部、28・29・31は口縁部が欠損している。30は口縁部片である。すべてロクロ使用のもので、内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。体部は緩く内湾しながら立ち上り口縁部に続く。24の口縁部だけはやや外反している。28・29・31はロクロからの切り離しが回転系切りで、再調整はみられない。出土地点は、22・28~30が床面直上、23・26・31がカマド右袖、24・27がカマド内、25が埋土である。

甕形土器 11点出土している。36・37・39・40は底部が欠損している。38・41は口縁部片、42・43、45~46は底部片である。42・43、45・46の底部以外はすべてロクロ使用のものである。36・37・39・40は口縁部が外傾し、口縁端部が直立している。38は口縁部が外反している。内外面ともロクロ痕が顕著である。41は長胴の器形を示し、口唇部が上下につまみ出されている。



(C-D)

1. 7.5Y R 5% 黒褐色粘土質シルト 非常に硬くしまっている。炭化物を幾分含む。
2. 7.5Y R 6% 黒褐色粘土質シルト 非常に硬くしまっている。炭化物を幾分含む。
3. 7.5Y R 6% 黒褐色粘土質シルト 非常に硬くしまっている。炭化物を幾分含む。
4. 7.5Y R 6% 黒褐色粘土質シルト 非常に硬くしまっている。炭化物を幾分含む。
5. 7.5Y R 6% 黒褐色粘土質シルト 非常に硬くしまっている。炭化物を幾分含む。
6. 7.5Y R 6% 黒褐色粘土質シルト 非常に硬くしまっている。炭化物を幾分含む。
7. 7.5Y R 6% 黒褐色粘土質シルト 非常に硬くしまっている。炭化物を幾分含む。
8. 7.5Y R 6% 黒褐色粘土質シルト 非常に硬くしまっている。炭化物を幾分含む。
9. 7.5Y R 6% 黒褐色粘土質シルト 非常に硬くしまっている。炭化物を幾分含む。

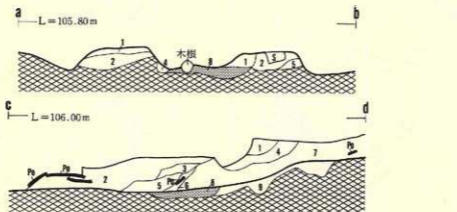


(A-B)

1. 10 Y R 5% 黒褐色粘土質シルト 非常に硬くしまっている
2. 7.5Y R 5% 黒褐色粘土質シルト 土層片を幾分含む
3. 7.5Y R 5% 黒色 粘土質シルト 北壁層では粘土、炭化物を幾分含む
4. 7.5Y R 5% 黒褐色粘土質シルト
5. 7.5Y R 5% 黒褐色粘土質シルト



図版8 F I - 2住居跡(1)



(a-b)

1. 2.SY R 写 暗赤褐色粘土質シルト ややしまっている、焼土殻を多く含む
2. 2.SY R 写 暗赤褐色粘土質シルト しまっていない炭化物、焼土殻を含む
3. 2.SY R 写 赤褐色
4. 7.SY R 写 灰白色粘土質シルト しまっている
5. 5.YR R 写 濃い赤褐色粘土質シルト しまっている、焼土殻、炭化物を混分含む

(c-d)

1. 7.SY R 写 黒褐色シルト しまっている
2. 7.SY R 写 暗褐色シルト しまっている、炭化物を少量含む
3. 7.SY R 写 暗赤褐色シルト ややしまっている、焼土殻を受けている
4. 5.YR R 写 暗赤褐色シルト 焼土殻を多く含む
5. 5.YR R 写 暗赤褐色シルト 焼土殻を多く含む
6. 5.YR R 写 濃い赤褐色シルト 焼土土器を含む
7. 7.SY R 写 黒褐色シルト 焼土殻、炭化物を混分含む

図版9 FI-2住居跡(2)

外面は体部上半がロクロまたはロクロ調整後ヘラケズリ、下半が主に縦方向のヘラケズリで調整されている。内面調整は上半がロクロまたはヘラナデ、下半がヘラナデである。42・43は外面がヘラケズリ、内面がヘラナデで調整されている。43の体部下端には刻線が多くみられる。47は小形の壺形土器の底部で、外面には回転糸切り痕がみられる。出土地点は36・37・40がカマド、38・45・46が床面、39・43が煙道、41・42・47が埋土である。

壺形土器 1点出土している。口縁部と底部が欠損している。体部の器形は球胴である。外面は上半がロクロ、下半がヘラケズリで調整されている。内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。カマド右袖の床面から出土している。

須恵器

坏形土器 34は体部が内湾している。ロクロ切り離しは回転糸切りである。再調整はない。酸化焙焼成の須恵器坏である。

32は体部がやや内湾し、口縁端部が外反している。ロクロからの切り離しは回転糸切である。再調整はない。床面から出土している。

甕形土器 44は丸底のもので、体部上半が欠損している。外面に叩き目痕、内面に当て具痕

がみられる。カマド際の床面から出土している。

33は壺形土器の破片と推定されるものである。内外面はロクロで調整されている。外面の一部はヘラケズリで再調整されている。

陶器

48は台付皿の底部である。内外面に淡黄色の釉がかけられている。埋土下部から出土している。

2. 古墳

B I - 1号古墳周濠

(図版10、写真図版8)

本遺構は調査区北西部にあり、稲荷神社の入口から南約13mに位置している。表土(23~48cm)、黒褐色シルト層(16~22cm)を取り除いた褐色シルト層の上面で検出されている。掘り込み面は黒褐色シルト層の下位である。周濠は上部を浅い幅の狭いB I - 101溝に切られている。周濠はやや北側に湾曲しながら北西~南東方向にのびていることから、古墳周濠の南西の一部であると推定される。

検出されている周濠の長さは約3.3mである。周濠の幅は1.44~1.56m、深さは14~27cmである。底部幅は0.63~1.2mで西端に近づくほどに狭くなる。周濠の断面は外側(南側)の壁面が緩く立ち上がり、内側(北側)の壁面が急な角度で立ち上がる。

埋土の大半は上位がにぶい黄橙色火山灰のブロック、下位に褐色シルトの小ブロックが混じる黒褐色シルトで占められ、最下部に黒色または黒褐色シルトが僅かに堆積している。出土遺物はない。

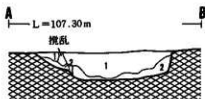
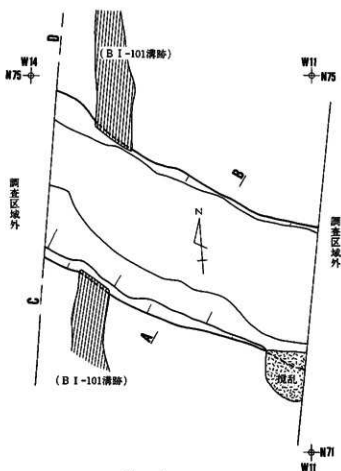
D I - 1号古墳周濠

(図版11、写真図版9)

本遺構は調査区中央部西側に位置し、盛土(30~40cm)、黒色シルト(20cm)を取り除いた褐色シルト上面で検出された。周濠は北東方向から東方向に湾曲し、両側が調査区域外にのびている。古墳周濠の北西部分にあたと推定される。

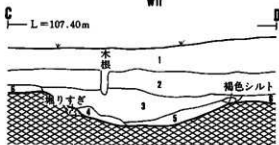
検出された周濠の長さは3.1mである。周濠幅は1.8~2.0mで、中央部がやや狭い。深さは0.44~0.61mで、両端が深い。底部幅は0.64~0.86mで、両端が広い。断面は北壁面が緩く南壁面が急な角度で立ち上がっている。

埋土は上位が黒色~黒褐色シルト、中位が全体に褐色シルトが混入している暗褐色シルト、下位が褐色シルト、砂が多く混入している暗褐色シルトで構成されている。出土遺物はない。



(A-B)

1. 7.5Y R 5/6 黒褐色シルト 上位に灰白色火山灰含む
2. 7.5Y R 5/6 暗褐色シルト 褐色シルトを多く含む

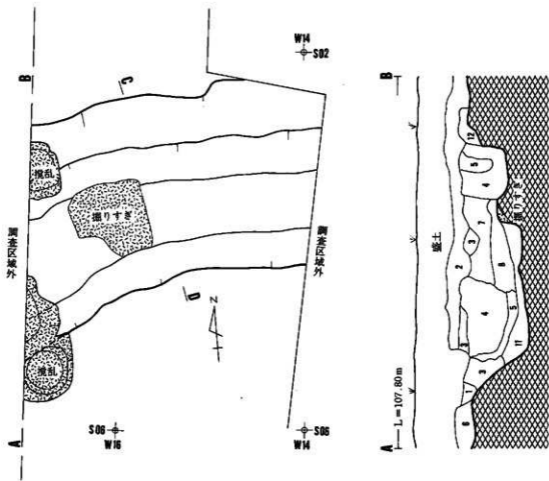


(C-D)

1. 7.5Y R 5/6 黒褐色砂礫 盛土
2. 10 Y R 5/6 黒褐色シルト 小礫混入、上位に灰火物
3. 7.5Y R 5/6 黒褐色シルト 下位に灰白色火山灰混入
4. 7.5Y R 5/6 暗褐色粘土質シルト 褐色シルトを小ブロック状に含む
5. 7.5Y R 5/6 黒色粘土質シルト 暗褐色、褐色シルトを含む
6. 7.5Y R 5/6 黒褐色シルト 褐色シルト層を含む

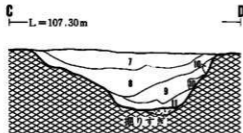


図版10 B I - 1号古墳調査

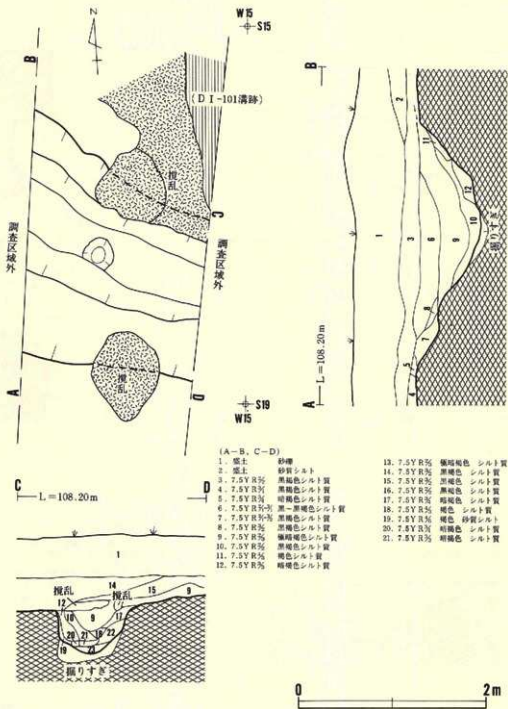


(A-B, C-D)

1. 盛土
 2. 7.5Y R/6 黒褐色砂質シルト 硬くしまる
 3. 7.5Y R/6 黒褐色シルト質 柔らかい
 4. 7.5Y R/3 黒褐色シルト質 硬くしまる
 5. 7.5Y R/3 黒色シルト質 柔らかい、褐色シルト含む
 6. 7.5Y R/3 黒色シルト質 全体に褐色シルト混入
 7. 7.5Y R/3 黒褐色シルト質 硬い
 8. 7.5Y R/6 暗褐色シルト質 硬くしまる、褐色シルト含む
 9. 7.5Y R/6 黒褐色シルト質 柔らかい、砂粒混入
 10. 7.5Y R/6 暗褐色シルト質 柔らかい、褐色シルトのアロック含む
 11. 7.5Y R/6 褐色砂質シルト 柔らかい、砂とシルトの混入
 12. 7.5Y R/6 黒褐色シルト質 柔らかい、暗褐色シルト含む
- ①-⑤は掘削部



図版11 D I - 1号古墳周濠



図版12 D I - 2号古墳周濶

D I - 2号古墳周濠

(図版12、写真図版10)

本遺構は調査区中央部西側にあり、D I - 1号古墳周濠の南12mに位置している。盛土(40cm)を取り除き、黒褐色シルト(20cm)を掘り下げた褐色シルトの上面で検出された。北側の一部は現代の擾乱を受け、北壁上面が破壊されている。検出された周濠は古墳周濠の南西部の一部分にあたと推定される。

検出されている周濠の長さは2.1mである。両端は調査区域外にのびている。周濠の幅は1.4m、深さは0.4mである。底部幅は0.44~0.50mである。断面の形状は緩い「U」字形を呈している。

埋土は上位が黒色~黒褐色シルト、中位が褐色シルトをブロック状に混入する極暗褐色~暗褐色シルト、下位が褐色シルトと黒色シルトがブロック状に混じる黒褐色シルトで占められている。そのほか、南壁面直上には暗褐色シルト~褐色シルトが再堆積している。出土遺物はない。

D I - 3号古墳周濠

(図版13、写真図版11)

本遺構は調査区中央部西側にあり、D I - 2号古墳周濠の南5mに位置している。暗褐色シルトの盛土(32~40cm)と極暗褐色シルト層(16~20cm)を取り除いた褐色シルト層の上面で検出されている。周濠は東西方向に走る現在使用されている排水管の部分を除いて、精査を行った。南壁の一部が現代の擾乱によって破壊されている。周濠は幾分弧状を呈し、その両端が調査区域外へのびている。周濠の北東部にあたと推定される。

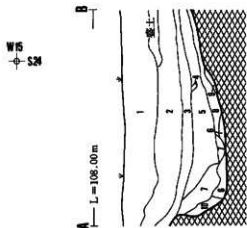
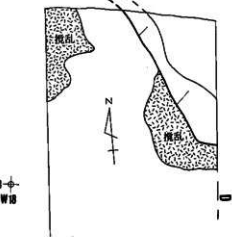
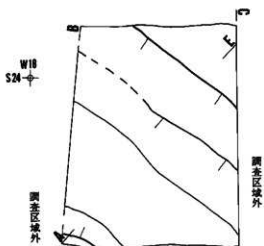
検出されている周濠の長さは2.1m、深さは0.51~0.59mである。底部幅は0.92~1.32mで、東端が広い。断面の形状は緩い「U」字形を呈している。南壁面が北壁面よりもやや急な勾配をしている。

埋土は上位が黒褐色シルト、中位が黄褐色~にぶい黄褐色の火山灰が小ブロック状に混じる暗褐色シルト、下位が黒褐色シルトと褐色砂とをブロックで混じる暗褐色砂質シルトで占められている。埋土は自然堆積の様相を呈している。出土遺物はない。

E I - 1号古墳周濠

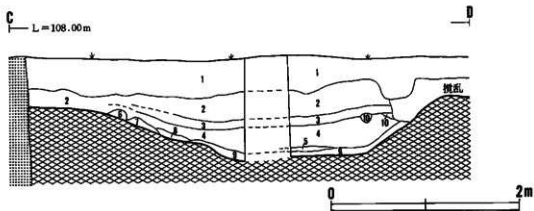
(図版15、写真図版12)

本遺構は調査区中央部(南半)西側に位置している。盛土(18cm)、暗褐色シルト層(22cm)を除去した褐色シルト層の上面で検出された。周濠は弧状を呈し東端が調査区域外へのびてい

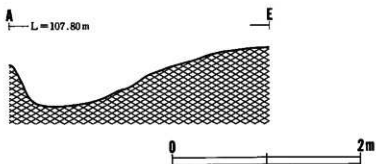


(A-B, C-D)

1. 盛土
2. 7.SY R% 凝褐色砂質シルト
3. 7.SY R% 高褐色シルト質
4. 7.SY R% 暗褐色砂質シルト 火山灰含む
5. 7.SY R% 高褐色シルト質
6. 7.SY R% 凝褐色シルト質
7. 7.SY R%-混 暗褐色砂質シルト
8. 7.SY R%-混 褐色〜暗褐色砂
9. 7.SY R% 暗褐色砂質シルト
10. 7.SY R% 褐色〜暗褐色砂質土
11. 7.SY R% 暗褐色シルト質
12. 7.SY R% 黒褐色シルト質
13. 7.SY R% 凝暗褐色シルト質



図版13 D I-3号古墳周辺 (1)



図版14 D I-3号古墳周濠 (2)

る。南壁の東半分は現代の擾乱を受け破壊されている。検出された周濠は古墳周濠の南東部にあたると推定されている。

検出された周濠の長さは2.9 mである。幅は1 m前後と推定される。深さは7～51 cmで、西端にいくほどに浅くなる。西端はやや丸味を帯びて閉じている。断面の形状はやや緩い「U」字形を呈していたと思われる。

埋土は暗赤褐色砂と黒色シルトの混合土で、大半は小礫がわずかに混入する暗褐色砂質土で占められている。出土物はない。

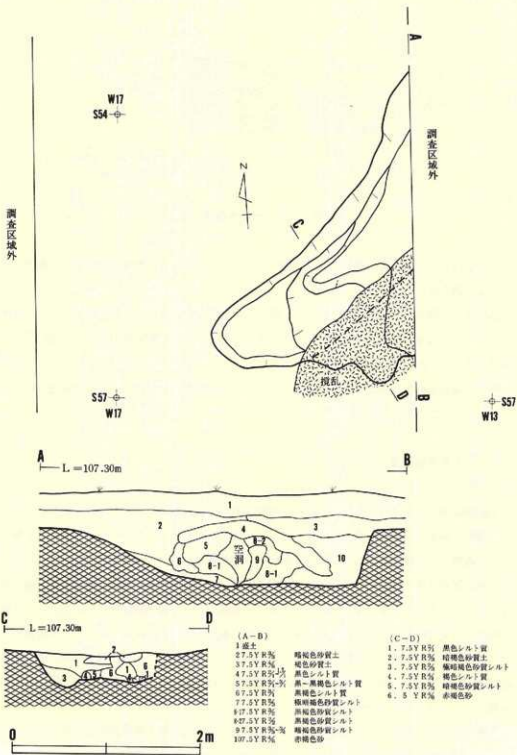
B II-1号古墳周濠

(図版16、写真図版13)

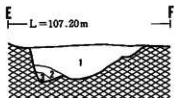
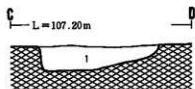
本遺構は調査区北東部に位置している。周濠は東側から南側にかけての部分が発出されている。周濠の検出面は表土の暗褐色砂質シルト層(20 cm)と暗褐色シルト層(24～32 cm)を取り除いた褐色シルト層上面である。周濠は南側中央部が踏切れている。

東側の周濠は半円形を呈し、北端部が先細りしている。周濠の長さは約6 mである。最大幅は中央部で1.4 mである。深さは28～36 cmで、中央部が深い。底部幅は48～76 cmである。主体部側の西壁面は底部からほぼ直立して立ち上がり、東壁面は緩やかに立ち上がる。両壁面の勾配は中央部ほど差が大きい。埋土は大半が暗褐色シルトや褐色シルトがブロック状に混じる極暗褐色シルトで占められている。中央部西側はB II-52土坑に切られ、南端部はB II-61・62土壌を切ってつくられている。

西側の周濠は南端部の一部だけが検出されている。形状は東側の周濠南端部と類似する。検出されている周濠の長さは1.5 m、周濠の最大幅は0.72 mである。周濠は幅60 cmで南北に国道4号の側溝によって切られている。



図版15 EI-1号古墳周濠

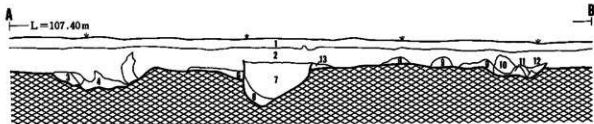
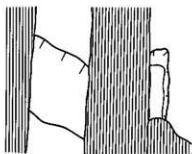
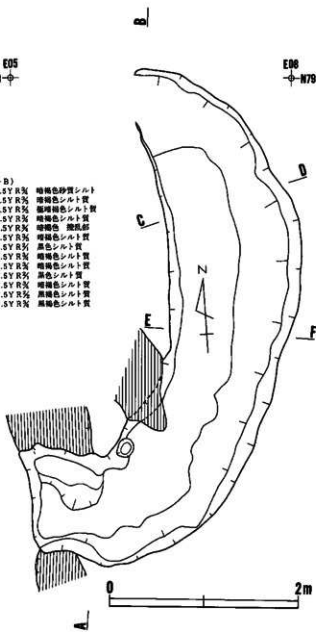


(C-D, E-F)
 1. 7.5Y R5/6 暗褐色シルト質
 2. 7.5Y R5/6 黒色シルト質
 3. 7.5Y R5/6 褐色シルト質

E05
 N79

E06
 N79

- (A-B)
 1. 7.5Y R5/6 暗褐色砂質シルト
 2. 7.5Y R5/6 暗褐色シルト質
 3. 7.5Y R5/6 暗褐色シルト質
 4. 7.5Y R5/6 暗褐色シルト質
 5. 7.5Y R5/6 暗褐色 塊状部
 6. 7.5Y R5/6 暗褐色シルト質
 7. 7.5Y R5/6 黒色シルト質
 8. 7.5Y R5/6 暗褐色シルト質
 9. 7.5Y R5/6 暗褐色シルト質
 10. 7.5Y R5/6 黒色シルト質
 11. 7.5Y R5/6 暗褐色シルト質
 12. 7.5Y R5/6 暗褐色シルト質
 13. 7.5Y R5/6 暗褐色シルト質



図版16 B II - 1号古墳明遺

東側周濠の南端部の埋土から、土師器変形土器の小破片が数点出土している。外面はハケメ、内面はナデ調整されている。

B II - 2号古墳周濠

(図版17、写真図版14)

本遺構は調査区北東部にあり、B II - 1号古墳の南東3mに位置している。検出面は表土の黒色シルト(20~35cm)、黒褐色シルト層(12~24cm)の下位、褐色シルト層上面である。検出された周濠は古墳周濠の西側の部分にあたる。大半は調査区外の東側の畑地にある。

周濠の長さは6.2m、幅は1.52~1.7mである。深さは10~45cmで、中央部が深く、北端部が浅い。底部の幅は1.09~1.24mである。底面は凹凸がある。断面は東壁面が急な角度で立ち上がるのに対して、西壁面は緩やかに立ち上がる。

埋土は上位が黒色シルト、中位が下半部に褐色シルトの小粒が多く混じる暗褐色シルト、下位が全体に褐色シルトを粒状に多く混じる黒褐色土で占められ、上位と中位の間に、褐色の細粒浮石がブロック、または帯状に堆積している。

B II - 3号古墳周濠

(図版18、写真図版15)

本遺構は調査区北端部東側に位置している。北の段丘崖から南に約20mにある。検出面は表土(約40cm)を取り除いた褐色シルト層上面である。検出されている周濠は西側の一部分で半円形を呈し、東側半分以上は調査区外の宅地へのびている。周濠は北部が径2m×1.5m、深さ50cm前後の規模で木根により攪乱を受けている。他の遺構との重複関係はない。

検出されている周濠の長さは約5mである。周濠の幅は1.1~1.3mで中央部がやや狭い。深さは12~26cmで中央部が幾分浅い。底部幅は0.9~1.1mである。周濠の断面は皿状を呈しているが、外側の壁が内側の壁より緩く立ち上がっている。

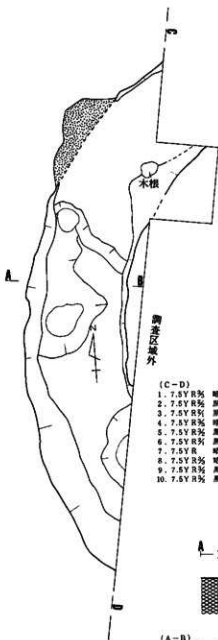
埋土は主に褐色シルトが小ブロックまたは小粒状に混じる黒褐色シルトで占められる。出土遺物はない。

B II - 4号古墳周濠

(図版19、写真図版16)

本遺構は調査区北東部にあり、B II - 2号古墳周濠の南約20mに位置している。表土(30~34cm)と下位の黒褐色シルト層(16~22cm)を掘り下げた褐色シルト上面で検出された。周濠の西側の一部が検出されているもので、大半は調査区外の畑地にある。外壁の輪郭線や外壁

E00
N74



(C-D)

1. 7.5Y R 5/6 暗褐色砂質シルト 黄土
2. 7.5Y R 5/6 暗褐色シルト質 硬くしまる。水很多い
3. 7.5Y R 5/6 褐色シルト質 ややしまる。炭化物混入
4. 7.5Y R 5/6 暗褐色シルト 硬くしまる。
5. 7.5Y R 5/6 暗褐色シルト 褐色シルトと原色土の混土
6. 7.5Y R 5/6 褐色シルト質 やや柔らかい
7. 7.5Y R 5/6 暗褐色砂質 細粒浮石多く含む
8. 7.5Y R 5/6 暗褐色シルト質 硬くしまる。褐色シルト含む
9. 7.5Y R 5/6 暗褐色シルト 硬くしまる。
10. 7.5Y R 5/6 暗褐色シルト質 褐色シルト多く混入

A L = 107.30m



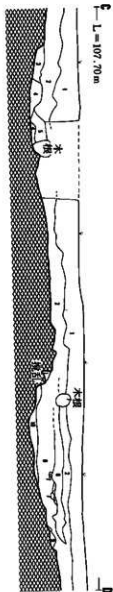
(A-B)

1. 7.5Y R 5/6 褐色シルト質 硬くしまる。褐色シルト層を含む
2. 7.5Y R 5/6 暗褐色シルト質 硬くしまる。褐色シルト含む
3. 7.5Y R 5/6 褐色シルト 硬くしまる。

0 2m

N06
E00

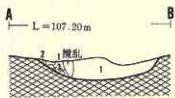
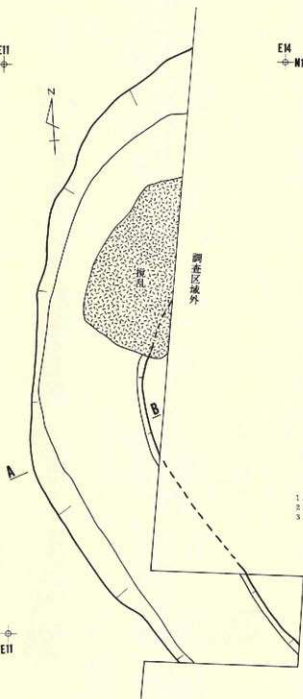
C
L = 107.70m



図版17 B II - 2号古墳周濠

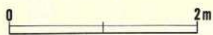
E11
N101

E14
N101

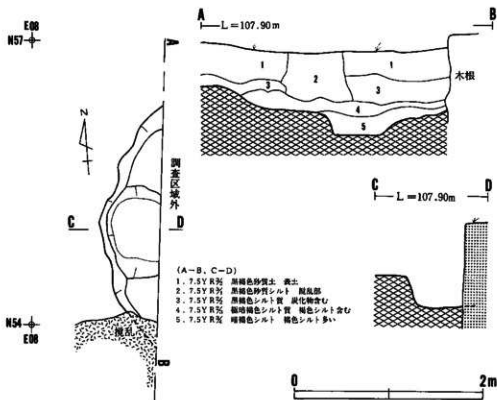


1. 7.5Y 5/2 黒褐色シルト質 全体に褐色シルト混入
2. 7.5Y 5/2 暗褐色シルト 強くしまっている
3. 7.5Y 5/2 褐色シルト 灰色土塊が混入

N95
E11



図版18 B II - 3号古墳周濠



図版19 B II - 4号古墳周濠

の立ち上がり方、埋土などから、古墳周濠の一部と断定したものである。南端部が木根により攪乱を受けている。他の遺構との重複はない。

周濠は外壁側の一部が検出されているだけなので、周濠の幅、深さなどの詳細については不明である。検出された部分の最大幅は64cmである。深さは中央部が最も深く、36cmを測る。

埋土は上半部が全体に褐色シルトが小粒状に混入する極暗褐色シルト、下半部が褐色シルトがブロック状に混じる暗褐色シルトで構成されている。出土遺物はない。

B II - 5号古墳周濠

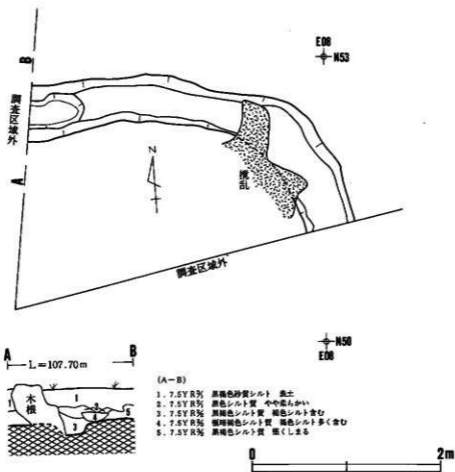
(図版20、写真図版17)

本遺跡は調査区北部にあり、B II - 4号古墳周濠の南西約2mに位置している。表土(22-

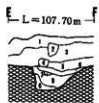
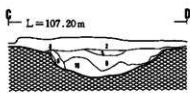
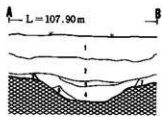
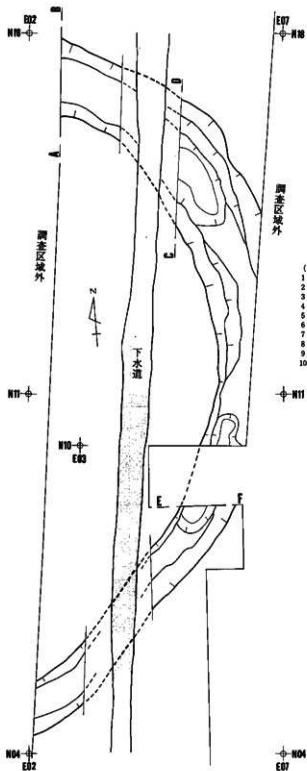
24cm)、黒褐色シルト層(22~28cm)を取り除いた褐色シルト層の上面で検出されている。掘り込み面は黒褐色シルト層の面と思われる。

周濠は東西方向から東側で湾曲して南北方向にのびている。検出されている部分は古墳周濠の北東部にあたると推定される。周濠の幅は50~55cm、深さは3~11cmである。底部幅は24~45cmである。底面は幾分凹凸がある。検出されている周濠の長さは約3.7mである。断面は「U」字形を呈している。

埋土は上半部が黒色シルト、下半部が全体に褐色シルトの小粒が混じる黒褐色シルトで構成される。出土遺物はない。



図版20 BII-5号古墳周濠



- (A-B, C-D)
1. 7.5Y R% 暗褐色砂質土 礫土
 2. 7.5Y R% 黒褐色シルト質 硬くしまる
 3. 7.5Y R% 硬暗褐色シルト質 暗色化した地山
 4. 7.5Y R% 暗褐色シルト質 しまっている。暗色シルト混入
 5. 7.5Y R% 暗色シルト質 しまっている
 6. 7.5Y R% 暗褐色シルト質 暗色シルト多い
 7. 7.5Y R% 暗褐色シルト質 暗色化した地山
 8. 7.5Y R% 暗褐色シルト しまっている
 9. 7.5Y R% 暗褐色シルト質 暗色シルト混入
 10. 7.5Y R% 暗褐色シルト質 暗色シルト多い

1. 7.5Y R% 暗褐色 礫土
2. 7.5Y R% 暗褐色砂質シルト 硬い礫
3. 7.5Y R% 硬暗褐色シルト質 工層礫層
4. 7.5Y R% 暗褐色シルト質 硬い礫
5. 7.5Y R% 暗褐色シルト質 粘性あり
6. 7.5Y R% 暗褐色シルト 暗色シルトと暗褐色土の混合土
7. 7.5Y R% 暗褐色シルト 暗褐色土層か含む
8. 7.5Y R% 暗褐色シルト 礫土多い
9. 7.5Y R% 暗褐色シルト質 暗色シルト含む

図版21 C II - 1号古墳周濠

C II - 1号古墳周濠

(図版21、写真図版18)

本遺構は調査区中央部東側にあり、C II - 5号古墳周濠の南約30mに位置している。盛土(30~36cm)、黒褐色シルト層(25~35cm)を取り除いた褐色シルト層上面で検出された。検出された部分は東側3分の1である。

幅は1.36~1.64cm、北東隅が最も広く南側に行くほどに狭くなる。深さは最も深い北東隅で50cm、最も浅い南で12cmである。底部幅は36~122cmである。検出されている周濠の長さは約15m、外径は13~14mと推定される。周濠の断面は北が狭い「U」字形を呈し、南東隅が内側のみ鋭く立ち上がる形を呈している。

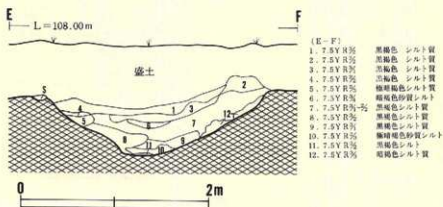
北側の埋土は大半が全体に褐色シルトを小粒状に混じる黒褐色シルトで占められ、わずかに最上部に黒色シルトが堆積している。他の遺構との重複関係はない。出土遺物はない。

D II - 1号古墳周濠

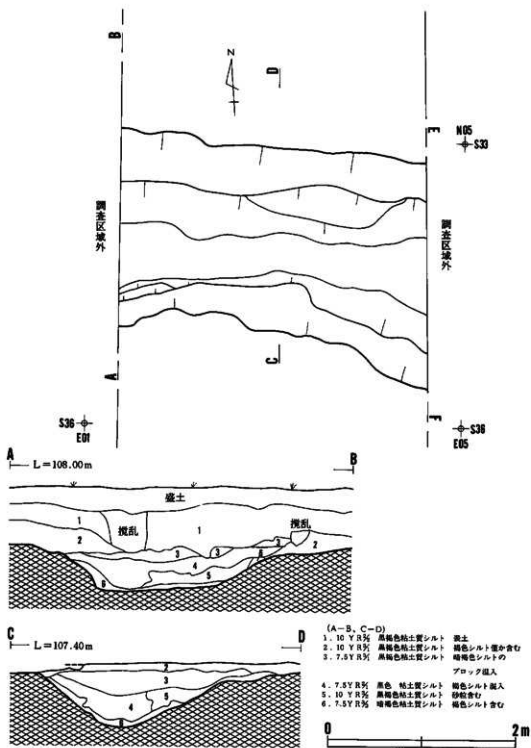
(図版22、写真図版19)

本遺構は調査区中央部東側にあり、C II - 1号古墳周濠の南約37mに位置している。盛土(42~67cm)、黒褐色シルト層(16~24cm)を取り除いた褐色シルト層の上面で検出されている。周濠は東西方向にのび、両端が南側に湾曲しながら調査区外へのびている。検出されている周濠は古墳周濠の北側の部分であると推定される。

幅は1.77~2.31m、深さは39~60cmである。東側によるほどに周濠は広く深くなる。底部幅



図版22 D II - 1号古墳周濠(1)



図版23 D II - 1号古墳周濠(2)

は42～80cmである。周濠の内部の壁面はやや急な立ち上がりをするのに対し、外側の壁面は緩やかな立ち上がりをしている。

埋土は上部が暗褐色シルトをブロックで混じる黒褐色シルト、中部が褐色シルトを粒状に混じる黒色シルト、下部が砂を幾分混じる黒褐色シルトで占められている。他の遺構との重複関係はない。出土遺物はない。

E II - 1号古墳周濠

(図版24、写真図版20)

本遺構は調査区中央東側にあり、D II - 1号古墳周濠南約11mに位置している。検出された部分は3m×1mであるが、断面、形状、埋土などから、古墳周濠の一部と断定した。盛土(50～54cm)、黒褐色シルト層(28～35cm)を取り除いた褐色シルト層の上面で検出されている。東端は攪乱を受け、南西側の一部は電柱があるため精査できなかった。

検出された周濠は古墳周濠の北側の部分にあたと推定される。幅は約1.3m、深さは28～50cmである。底部径は1.06mである。断面は内側壁面がやや急な角度で立ち上がり、外側の壁面が緩い勾配で立ち上がる形状を呈している。

埋土は上位が極暗褐色砂質シルト、中位が全体に褐色シルトをわずかに混じる黒褐色シルト、下位が暗褐色シルトで構成されている。出土遺物はない。

E II - 2号古墳周濠

(図版25、写真図版21)

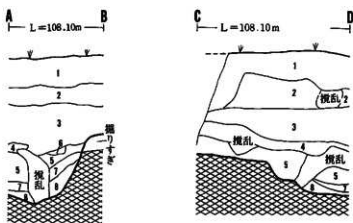
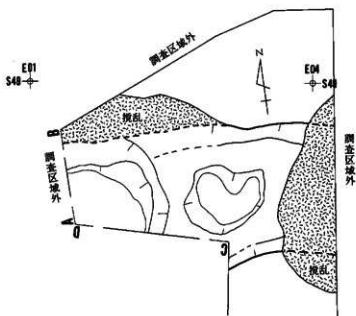
本遺構は調査区東側にあり、E II - 1号古墳周濠の南約3mに位置している。盛土(24～42cm)、黒褐色シルト層(30～44cm)を取り除いた褐色シルト層の上面で検出されている。南側はE II - 103溝に切られている。

検出された周濠は西側の一部で、南北径4.9m、東西径0.8mである。幅は不明である。中央部が最も深く、壁に近づくにつれて浅くなる。最大深は約44cmである。外側の壁面はやや緩い角度で立ち上がる。

埋土は大きく3層に分けられる。上位が黒褐色シルト、中位が黒褐色シルト、下位が全体に褐色シルトが小粒状に混じる極暗褐色シルトで構成されている。埋土は浅皿状に堆積しており、自然堆積の様相を呈している。出土遺物はない。

E II - 3号古墳周濠

(図版26、写真図版22)

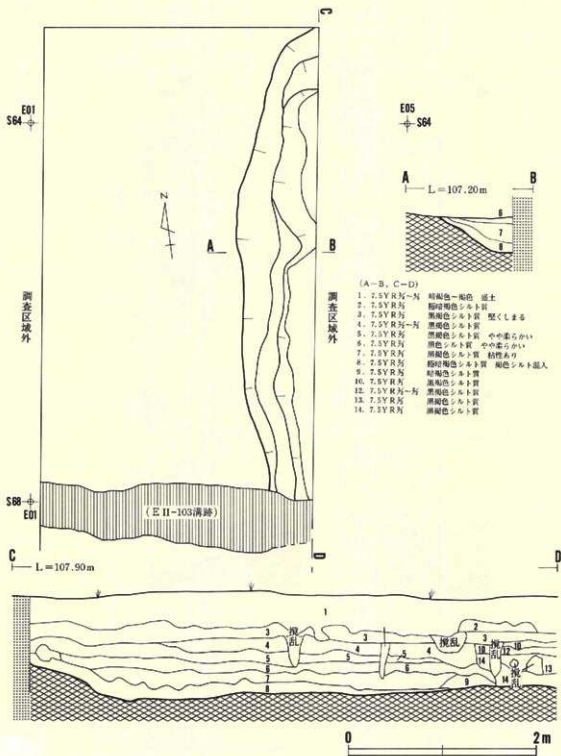


(A-B, C-D)

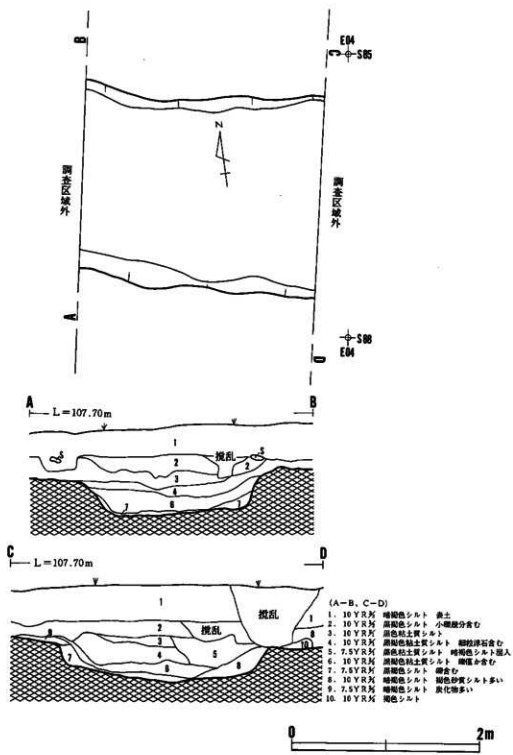
1. 盛土
2. 7.5Y R列 黒褐色砂質土 1層土
3. 7.5Y R列 黒褐色シルト質 柔らかい炭化物含む
4. 7.5Y R列 黒色シルト質 柔らかい
5. 7.5Y R列 暗褐色砂質シルト 盛くしまっている
6. 7.5Y R列 暗褐色砂質シルト 細粒浮石混入
7. 7.5Y R列 黒褐色シルト質 褐色シルト含む
8. 7.5Y R列 暗褐色砂質土



図版24 E II - 1号古墳周溝



図版25 E II - 2号古墳周溝



図版26 E II - 3号古墳周濠

本遺構は調査区南東部にあり、EⅡ-2号古墳周濠の南約7mに位置する。表土(34~39cm)、黒褐色シルト層(12~22cm)を取り除いた褐色シルト層の上面で検出されている。周濠はやや南側に湾曲していることから、古墳周濠の南側の一部と推定される。

周濠の幅は1.92~2.14m、深さは36~41cmである。底部幅は1.58~1.98mで中央部西寄りが幾分狭い。周濠断面は緩い「U」字形を呈する。内側の壁面は外側の壁面に比べてやや急な角度で立ち上がる。

埋土の大半は小礫が幾分混入する黒褐色シルトで占められ、わずかに最上位に黒色シルトが堆積している。埋土中位にはにぶい黄橙色の火山灰が小ブロックで幾分混じる。他の遺構との重複関係はない。出土遺物はない。

3. 土坑・土塋

EⅠ-51土坑

(図版27、写真図版23)

本遺構は調査区中央西側にある。上部に基礎コンクリートの土台がつくられているため、一部擾乱を受けている。検出面は盛土(59~66cm)、黒褐色シルト層(45~48cm)を取り除いた褐色シルト層の上面である。検出された部分は南壁の一部にすぎず、その形状・規模については不明である。規模は南北径3.3m、東西径1.5mである。南壁はやや急な角度で立ち上がる。底面は大小の凹凸が激しい。埋土の大半に明褐色または暗褐色シルトが全体に小ブロックで混じり、上位、中位、下位に黒褐色シルトと明褐色砂質シルトの混合土が帯状に入る黒褐色シルトで占められている。出土遺物はない。

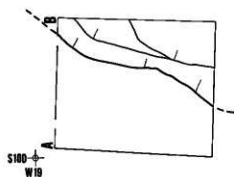
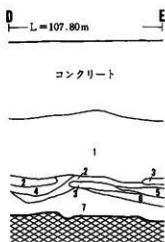
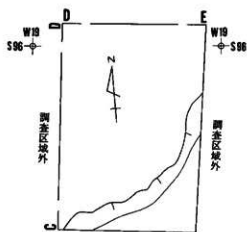
BⅡ-51土塋

(図版28、写真図版24)

本遺構は調査区北部東側にあり、BⅡ-1号古墳周濠の北約12mに位置している。検出面は褐色シルト層の上面である。木根により壁や底面の一部が擾乱を受けている。形状はやや隅丸の方形を呈し、規模は長径(北西~南東)1.98m、短径0.68m、深さ10cmである。主軸方位は磁北より西に25.5度寄る。南東壁の輪郭線はやや丸味を帯びている。底面は幾分凹凸がある。断面は舟底形を呈している。埋土は上位が黒褐色シルト、下位が炭化物を多く混じり粒状の褐色シルトを含む黒色シルトで構成されている。出土遺物はない。

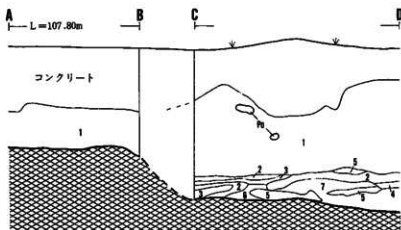
BⅡ-52土坑

(図版29、写真図版25)

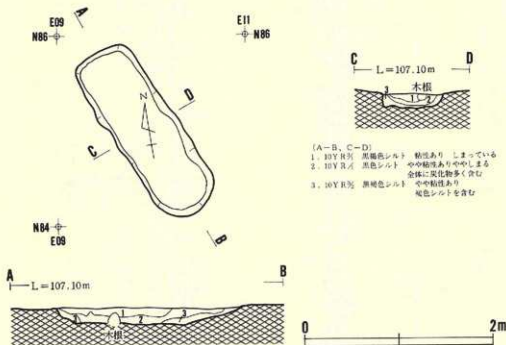


(A-B, C-D, D-E)

1. 7.5Y及列 黒褐色シルト しまっていて下に明褐色シルト
2. 7.5Y R列~列 黒褐色明褐色シルト シルトの混合土
3. 7.5Y R列 黒褐色シルト 炭化物を含む
4. 7.5Y R列 黒褐色シルト 暗褐色シルトを含む
5. 7.5Y R列 明褐色砂質シルト 黒褐色を含む
6. 7.5Y R列 黒褐色シルト 暗褐色シルトを含む
7. 7.5Y R列 極暗褐色シルト 暗褐色シルト明褐色シルトを混分含む、
堅くしまる



図版27 E I - 51土坑



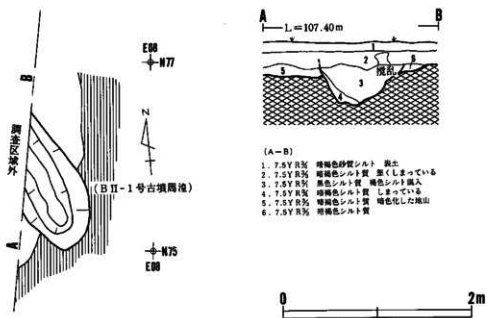
図版26 B II - 51土坑

本遺構は調査区北部東側にあり、B II - 1号古墳周濠の一部（内壁）を切ってつくられている。西側は調査区域外にのびている。検出面は褐色シルト層の上面である。検出されている輪郭線から土坑の平面形は細長い楕円形を呈しているものと推定される。検出された部分の長軸方向の長さは98cm、短軸は74cmである。深さは33~37cmである。底面は凹凸がある。断面は「U」字形を呈している。埋土の大半は小粒の褐色シルトが全体に混じる黒色シルトで占められ、わずかな壁直上に黒色シルトと褐色シルトの混合土が堆積している。

B II - 53土坑

(図版30、写真図版26)

本遺構は調査区北部東側にあり、B II - 1号古墳周濠の南約7mに位置している。検出面は褐色シルト層の上面である。土坑はB II - 104溝跡を切ってつくられている。精査際、土坑の埋土と溝の埋土との識別が困難で西壁を検出することができなかった。ベルトの土層断面から



図版29 B II-52土坑

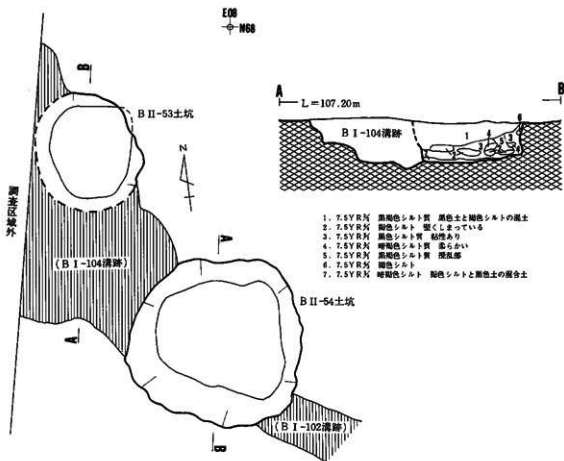
溝と土坑との新旧関係を把握した。

残存する壁の輪郭線とベルトの土層断面から、土坑は円形状を呈し、外径が1.1m、内径が1mと推定される。深さは47～50cmである。東壁下部の一部はオーバーハングしている。埋土は上位が褐色シルトを全体に小ブロックで混じる黒褐色シルト、下位が褐色シルトの大ブロック（長径12～25cm）を多く混じる黒色シルト、最下位が褐色シルトと黒色シルトの混合土で構成されている。出土遺物はない。

B II-54土坑

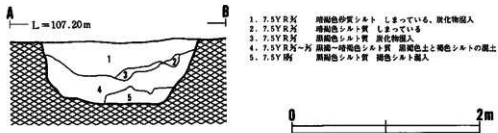
(図版30、写真図版26)

本遺構は調査区北部東側にあり、B II-53土坑の南東40cmに位置している。検出面は褐色シルト層の上面である。土坑はB II-104 溝跡を切ってつくられている。平面形は隅丸の不整台形を呈している。規模は長径（北西～南東）1.86m、短径1.76m、深さ62～76cmである。底部は長径1.52m、短径1.22mである。底部は幾分凹凸があり南壁側がやや深い。壁面は底部からやや緩く立ち上がる。埋土は上位が褐色シルト及び褐色砂をブロック状に混入し炭化物を少量



N63
E08

N63
E08



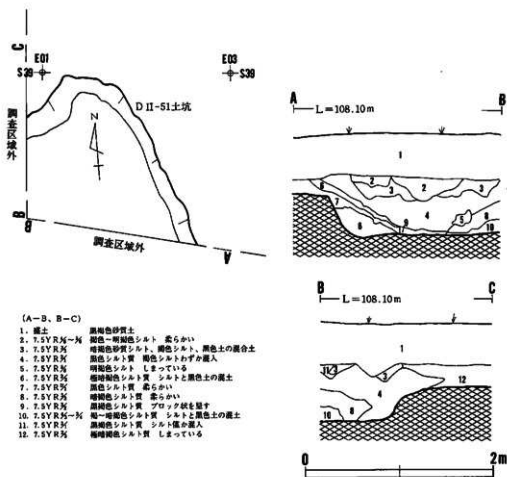
図版30 B II-53・54土坑

混じる暗褐色砂質シルト、中位が黒褐色シルトと褐色シルトの混合土、下位が褐色シルトのブロックが混じる黒褐色～極暗褐色シルトで構成されている。出土物はない。

D II - 51 土坑

(図版31、写真図版28)

本遺構は調査区中央部東側にあり、D II - 1 号古墳の北側の周濠から南に約 3 m に位置する。



図版31 D II - 51 土坑

北壁の一部と東壁の一部が検出されているのみである。そのほかは調査区外にあるため、土坑の規模、形状については不明である。検出された部分の規模は長径（北西～南東）1.82m、短径1.46m、深さ40～44cmである。底面は凹凸があり、中央部が幾分高い。埋土は主に上位が最上層部に褐色～明赤褐色シルトをのせる褐色シルトと暗赤褐色砂と黒色シルトの混合土、中位が帯状に堆積する褐色シルトと黒色シルトの混合土、下位が褐色シルトをブロックで多く混じる黒褐色シルトで構成されている。出土遺物はない。

E II - 51土壇

（図版32、写真図版29）

本遺構は調査区中央部東側にあり、E II - 2号古墳周濠の北約8mに位置している。検出面は盛土（32～40cm）、黒褐色シルト層（16～28cm）を取り除いた褐色シルト層の上面である。南東隅が調査区域外にあるが、形状は隅丸の長方形を呈し、規模が長径（北西～南東）1.68m、短径0.82m、深さ18～20cmである。主軸方位は磁北より30度西に寄る。底面は幾分凹凸がある。埋土は大半が褐色シルトのブロックをわずかに混じる黒色シルトで占められる。

南東隅寄りの底面から直刀（全長36cm）が出土している。直刀は刀先を北西方向に向けて副葬されている。錆びが著しく保存状態は良好でない。刀身は長さ33cm、幅2.2～3cmである。背部の厚さは5～6mmである。柄部には木質部が付着している。（P86～89参照）

E II - 52土坑

（図版32、写真図版30）

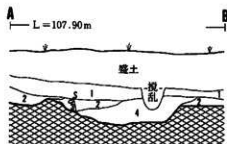
本遺構は調査区中央東側にあり、E II - 51土壇の南約2mに位置している。東側はE II - 54土坑に切られている。検出面は褐色シルト層の上面である。残存する輪郭線から土坑は隅丸の方形を呈していたと思われる。褐色の砂層を掘り込んでつくられているため、底面はやわらかく若干掘りすぎている。規模は南北径1.4m、東西径（残存部分）1.46m、深さ56cmである。埋土を観察するベルトを東端に設けたため、本土坑の埋土は最下位のみが残存している。上位はE II - 54土坑に切られている。埋土最下位は黒褐色シルトがブロックで混じる暗褐色シルトと褐色シルトが占めている。出土遺物はない。

E II - 53土壇

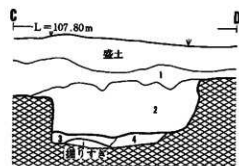
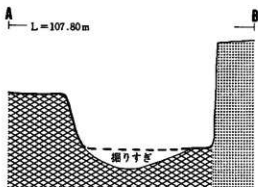
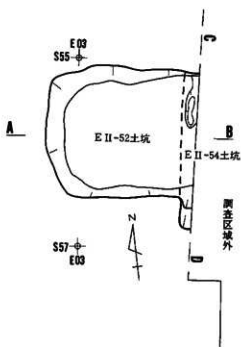
（図版33、写真図版31）

本遺構は調査区南部東側にあり、E II - 3号古墳周濠の南約2mに位置している。東側半分は調査区域外にある。検出面は盛土（18～30cm）、黒褐色シルト層（32～38cm）を取り除いた

E II-51土墳



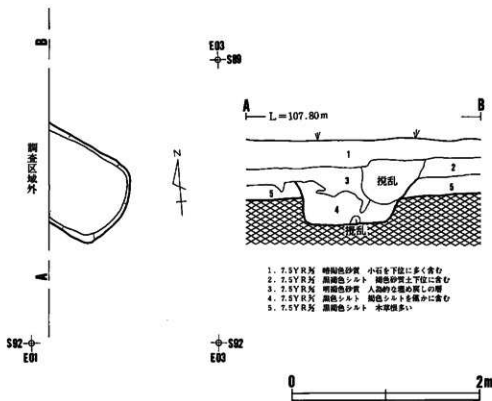
1. 7.5Y R 灰 黒褐色シルト 褐色シルトを含む、炭化物少量含む
2. 10 Y R 灰 黒褐色粘土質シルト 褐色シルト僅か含む
3. 10 Y R 灰 黒褐色粘土質シルト 褐色シルト多く含む
4. 7.5Y R 灰 黒色粘土質シルト ややしまり褐色シルトを僅か含む



1. 7.5Y R 灰 黒褐色シルト 炭らかい混わずか混入
2. 7.5Y R 灰 黒褐色シルト ややしまり全体に褐色砂質土、明褐色シルト多く含む
3. 7.5Y R 灰 暗褐色砂質 ややしまり黒褐色シルト含む
4. 7.5Y R 灰 褐色シルト しまり黒色土壌を含む



図版32 E II-51土墳、E II-52・54土墳



図版33 E II - 53土坑

褐色シルト層の上面である。掘り込み面は黒褐色シルト層中位である。検出されている部分から、隅丸の長方形を呈していると推定される。検出された部分の規模は長径（北西～南東）約1m、短径0.92m、深さ23～26cmである。主軸方位は磁北より西に53度寄る。底部は木根により一部攪乱を受けている。底面は幾分凹凸がみられる。埋土は主に褐色シルトを小ブロックに少量混じる黒色シルトで占められている。出土遺物はない。

E II - 54土坑

（図版32、写真図版30）

本遺構は調査区中央部東側にあり、E II - 52土坑の東側を切っつけられている。大半が東側の調査区域外にある。検出されている壁から、土坑は方形を呈していると推定される。検出

された部分の規模は南北径1.64m、東西径0.16m、深さ38cmである。底面はやや凹凸がある。埋土は主に褐色シルトを小ブロックに少量混じる黒色シルトで占められている。埋土から馬の蹄鉄や用途不明の鉄製品が出土している。

B II - 55土壇

(図版34、写真図版48、49)

本遺構は調査区北部東側にあたり、B II - 101 溝跡の北に隣接している。検出面は褐色シルト層の上面である。B II - 56土壇と重複しているが、新旧関係は不明である。土壇は形状が隅丸の不整長方形を呈し、規模が長径(南北)96cm、短径46cm、深さ38~48cmである。底部は隅丸長方形を呈し、長径71cm、短径26cmである。主軸方位は磁北より東に12度寄る。埋土は黒褐色シルトで占められている。

埋土から土師器変形土器の体部小破片(長さ1~3cm)が8片出土している。大半が磨耗しているため内外面の調整は不明である。うち1点は外面にミガキ調整が施されている。胎土には砂(石英、長石など)が多く混じる。

B II - 56土壇

(図版34、写真図版48、49)

本遺構は調査区北部東側にあり、B II - 101 溝跡の北に隣接している。B II - 55土壇と重複するが、新旧関係は不明である。検出面は褐色シルト層の上面である。土壇は平面形が隅丸の長方形を呈し、規模が長径(北西~南東)78cm、短径46cm(推定)、深さ31~33cmである。主軸方位は磁北より西に49度寄る。埋土は黒褐色シルトで占められている。出土遺物はない。

B II - 57土坑

(図版34、写真図版48、49)

本遺構は調査区北部東側にあり、B II - 55・56土壇の西30~50cmに位置している。西側の半分は国道の側溝のため破壊され消滅している。B II - 58・59土坑と重複しているが新旧関係は不明である。残存する壁の輪郭線から、土坑は東西にやや長い不整の楕円を呈していたと推定される。検出された部分での規模は長径51cm、短径47cm、深さ25~33cmである。底面は凹凸がある。埋土は黒褐色シルトで占められている。出土遺物はない。

B II - 58土坑

(図版34、写真図版48、49)

本遺構は調査区北部東側にあり、BⅡ-55・56土壌と隣接している。南側をBⅡ-101溝に切られている。BⅡ-57・59土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。検出面は褐色シルト層の上面である。形状は不整な方形である。検出されている部分での規模は長径69cm、短径46cm、深さ29～31cmである。埋土は黒褐色シルトで占められている。

埋土から土師器甕形土器の体部小破片（長さ1～4cm）が4点出土している。うち1点の外面には丹塗が施されている。胎土には砂が多く混じる。

BⅡ-59土坑

（図版34、写真図版48、49）

本遺構は調査区北部東側にあり、BⅡ-55・56土壌の西50cmに位置している。西側を国道の側溝に、南側をBⅡ-101溝に切られている。検出面は褐色シルト層の上面である。BⅡ-57・58土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。形状は不整形である。検出されている部分での規模は長径34cm、短径31cm、深さ42cmである。壁は東側が緩く、北側が急な角度で立ち上がる。埋土は黒褐色シルトで占められている。出土遺物はない。

BⅡ-60土壌

（図版34、写真図版49）

本遺構は調査区北部東側にあり、BⅡ-54・55土壌の南5mに位置している。土壌はBⅡ-104溝を切り、南側をBⅡ-1号古墳周濠に切られている。開口部の平面形はやや不整ながら隅丸の長方形、底部の形状は隅丸の長方形を呈している。規模は長径（北西～南東）1.14m、短径0.62m、深さ46～49cmである。長径82cm、短径36cmである。主軸方位は磁北より西に16度寄る。断面は舟底形を呈している。埋土は上位が褐色シルトを粒状に混じる黒褐色シルト、中位が褐色シルトの小ブロックを混じる黒色シルト、下位が褐色シルトの小ブロックを少量混じる黒褐色シルトで占められる。出土遺物はない。

BⅡ-61土壌

（図版34、写真図版49）

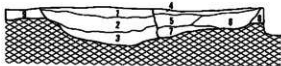
本遺構は調査区北部東側にあり、BⅡ-60土壌の南約1mに位置している。北側の一部はBⅡ-1号古墳周濠に切られている。検出面は褐色シルト層の上面である。平面形は隅丸の長方形を呈していたものと推定される。検出された部分の規模は長径（北西～南東）1.24m、短径0.54m、深さ26～33cmである。主軸方位は磁北より西に8度寄る。埋土は上部が黒褐色シルト、中部が褐色シルトを粒状またはブロック状に混じる暗褐色シルト、下部が橙色シルトで構成さ

A L=107.50m B



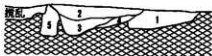
1. 7.5Y R 灰 黒褐色シルト質 褐色シルトをブロック状に混入
2. 7.5Y R 灰 暗褐色シルト質 褐色シルトを粒-ブロック状に混入
3. 7.5Y R 灰 褐色シルト質 褐色シルトをブロック状に混入
4. 7.5Y R 灰 暗褐色シルト質 褐色シルトをブロック状に混入
5. 7.5Y R 灰 暗褐色シルト質 褐色シルトを粒-ブロック状に混入
6. 7.5Y R 灰 暗褐色シルト質 褐色シルトをブロック状に混入
7. 7.5Y R 灰 暗褐色シルト質 褐色シルトをブロック状に多量に混入

C L=107.50m D



1. 7.5Y R 灰 黒褐色シルト質 褐色シルトの細粒混入
2. 7.5Y R 灰 褐色シルト質 褐色シルトの細粒混入
3. 7.5Y R 灰 暗褐色シルト質 褐色シルトを小ブロック状に少量混入
4. 7.5Y R 灰 黒褐色シルト質 褐色シルトの細粒混入
5. 7.5Y R 灰 暗褐色シルト質 褐色シルトを小ブロック状に混入
6. 7.5Y R 灰 暗褐色シルト質 褐色シルトをブロック状に多量に混入
7. 7.5Y R 灰 黒褐色シルト質 褐色シルトをブロック状に少量混入
8. 7.5Y R 灰 暗褐色シルト質 褐色シルトをブロック状に混入
9. 7.5Y R 灰 黒褐色シルト質 褐色シルトをブロック状に少量混入

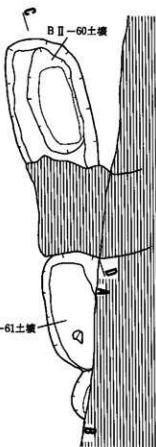
E L=107.50m F



1. 7.5Y R 灰 暗褐色シルト質 褐色シルトを粒-ブロック状に混入
2. 7.5Y R 灰 暗褐色シルト質 褐色シルトを粒状に混入
3. 7.5Y R 灰 黒褐色シルト質 褐色シルトを粒状に混入
4. 7.5Y R 灰 暗褐色シルト質 褐色シルトをブロック状に混入
5. 7.5Y R 灰 暗褐色シルト質 褐色シルトをブロック状に混入

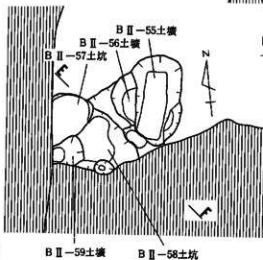
E04
N70

E06
N70



N67
E04

E07
N75



N73
E04

図版34 B II - 55・56・60・61土坑、B II - 57・58・59土坑

れている。出土遺物はない。

4. 溝跡

B I - 101 溝跡

(図版35、写真図版32)

本遺構は調査区北部西側にあり、B I - 1号古墳周濠の上部を切っつけられている。溝はほぼ南北に走り、北側が調査区域外にのび南側が途中で消失している。中央部西側の一部は攪乱を受けている。検出面は褐色シルト層上面である。検出された部分での規模は長さ25.6m、幅36~52cm、深さ10~24cmである。底部幅も一様でなく19~26cmである。底面は凹凸が多い。埋土は褐色シルトを粒状に混じる黒褐色シルトで占められている。出土遺物はない。

B I - 102 溝跡

(図版35、写真図版33)

本遺構は調査区北部西側にあり、B II - 101 溝跡と一部北側で併行して走る。南側は新しい穴によって攪乱を受けている。検出面は褐色シルト層上面である。検出された部分の規模は長さ2.8m、幅30~38cm、深さ6~16cmである。底面は凹凸が多く波状を呈している。埋土は褐色シルトを粒状で幾分混じる黒褐色シルトで占められている。出土遺物はない。

D I - 101 溝跡

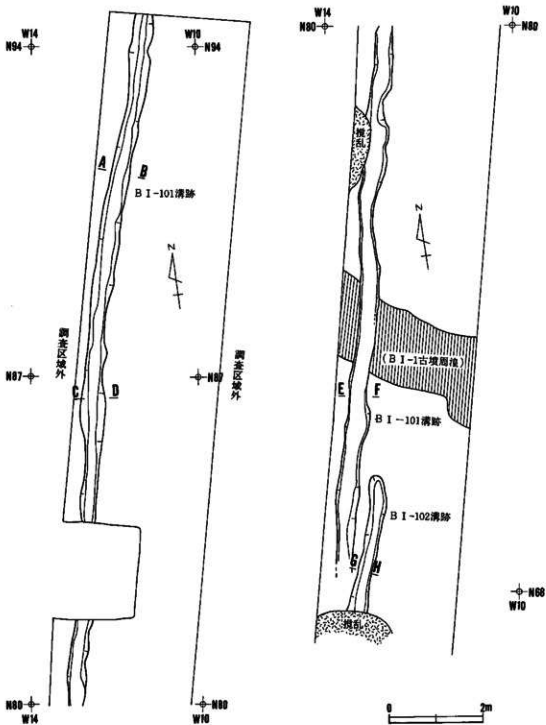
(図版37、写真図版34)

本遺構は調査区中央部西側にあり、D I - 2号古墳周濠と隣接している。西側の壁上部は一部攪乱を受けている。溝はほぼ南北に走り、両端は調査区域外にのびている。検出面は褐色シルト層の上面である。検出された部分の規模は長さ約6m、幅57~80cm、深さ31~40cmである。底部幅は25~42cmである。底面は幾分凹凸がある。埋土は上半部が全体に褐色シルトを粒状に混じる黒色~黒褐色シルト、下半部が黒色シルトをブロック状に混じる褐色シルトで占められている。出土遺物はない。

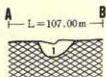
F I - 101 溝跡

(図版36、写真図版35)

本遺構は調査区南部西側にあり、F I - 1住居跡の北7mに位置している。溝は東西に走り、両端が調査区域外へのびている。中央部はF I - 102 溝に切られている。検出面は褐色シルト層の上面である。検出された部分での規模は長さ2.05m、幅46~50cm、深さ19~25cmである。底部

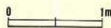


图版35 B I - 101 · 102 清跡(1)



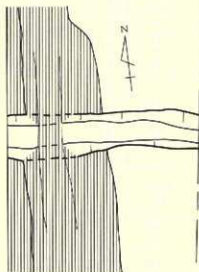
(A-B, C-D, E-F)

- | | |
|------------------|--------------|
| 1. 7.5Y R 汚濁色シルト | 褐色シルトを全体に含む |
| 2. 7.5Y R 汚濁色シルト | 褐色シルトのブロック混入 |
| 3. 7.5Y R 暗褐色シルト | 褐色シルトを多く含む |
| 4. 7.5Y R 黒褐色シルト | 褐色シルトを含む |

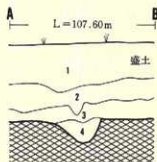


1. 7.5Y R 汚濁色シルト しまっていて褐色シルトを幾分含む

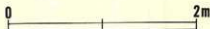
W20
S117



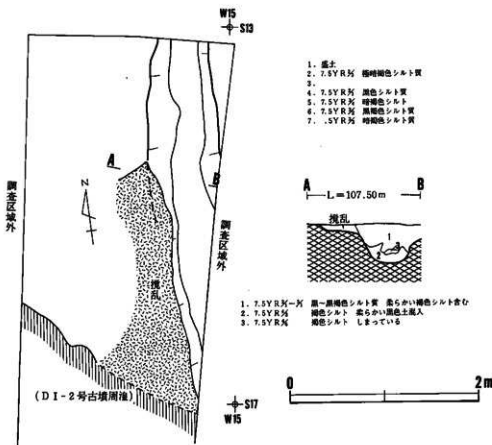
F I-101溝跡



- | | |
|------------------|-----------------------|
| 1. 7.5Y R 汚濁色 盛土 | |
| 2. 7.5Y R 汚濁色シルト | しまっていて炭化物を含む |
| 3. 7.5Y R 汚濁色シルト | しまっていて粘性あり |
| 4. 7.5Y R 汚濁色シルト | しまっていて褐色シルトを含む、土壌断片含む |



図版36 B I-101・102溝跡(2)、F I-101溝跡



図版37 D I - 101 溝跡

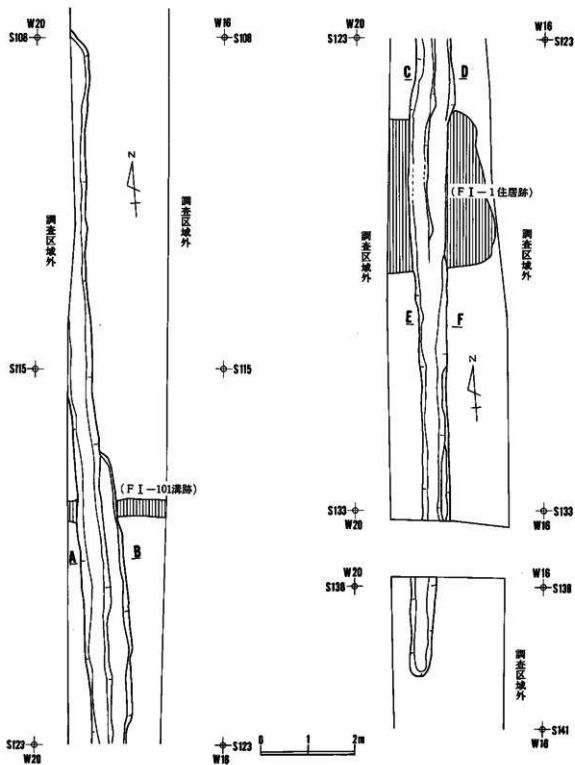
幅は12~22cmである。断面は「U」字形を呈している。埋土にはおひ褐色シルトを粒状に混り、焼土粒を幾分含む黒褐色シルト層である。

埋土から土師器変形土器の小破片(1~2cm)が3点出土している。磨耗しているため、内外面の調整は不明である。

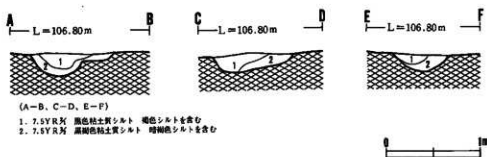
E I - 102 溝跡

(図版38・39、写真図版36)

調査区南部西側にあり、F I - 101 溝跡、F I - 1 住居跡を切ってつくられている。溝は南北に走り北端が調査区域外へ、南端が途中で消失している。検出面は褐色シルト層上面である。検出された部分の規模は中央部で幅84~100cm、深さ13~26cm、南側で幅56~64cm、深さ7~



图版38 F I - 102 沟址(1)



図版39 F I - 102 溝跡(2)

16cmである。中央部の完掘状態をみると、新旧の2条となる可能性もあるが、埋土断面からは観察することができなかつた。溝の全長は約28mである。断面は「U」字形を呈している。底面は幾分凹凸がある。埋土は上部が褐色シルトをブロックで混じる黒色シルト、下部が暗褐色シルトを粒状に含む黒褐色シルトで占められている。出土遺物はない。

F I - 103 溝跡

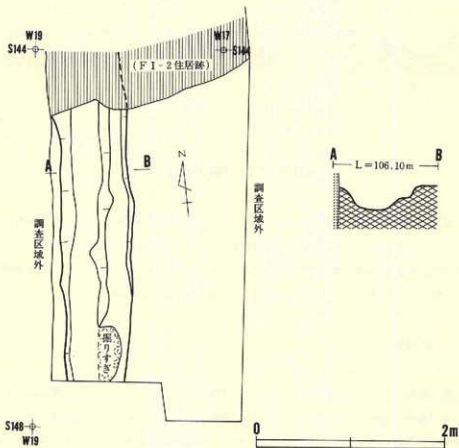
(図版40)

本遺跡は調査区南端の西側にありF I - 2 住居跡を切つてつられている。溝はほぼ南北に走り両端が調査区域外へのびている。南側は一部攪乱を受けている。住居跡と切り合っている溝の部分は住居跡精査時の掘り過ぎにより、全体の形状を把握することができなかつた。検出面は褐色シルト層の上面である。検出された部分の規模は長さ3m、幅66~76cm、深さ18~25cmである。底部幅は21~31cmである。底面は幾分凹凸がある。断面は東側が一段浅く西側が、「U」字形を呈している。埋土は褐色シルトをブロックで混じる黒褐色シルトで占められている。出土遺物はない。

A II - 101 溝跡

(図版41、写真図版37)

本遺構は調査区北部東側にあり、A II - 3 号古墳周濠の北約10mに位置している。溝はやや北側に湾曲しながら東西方向に走る。西端は攪乱を受け東端は調査区域外へのびている。検出面は褐色シルト層の上面である。検出された部分の規模は長さ2.2m、幅46~61cm、深さ13~23cmである。底面は幾分凹凸があり中央部が深い。断面は「U」字形を呈している。埋土は褐色シルトブロックで多く混入している極暗褐色シルトで占められている。出土遺物はない。

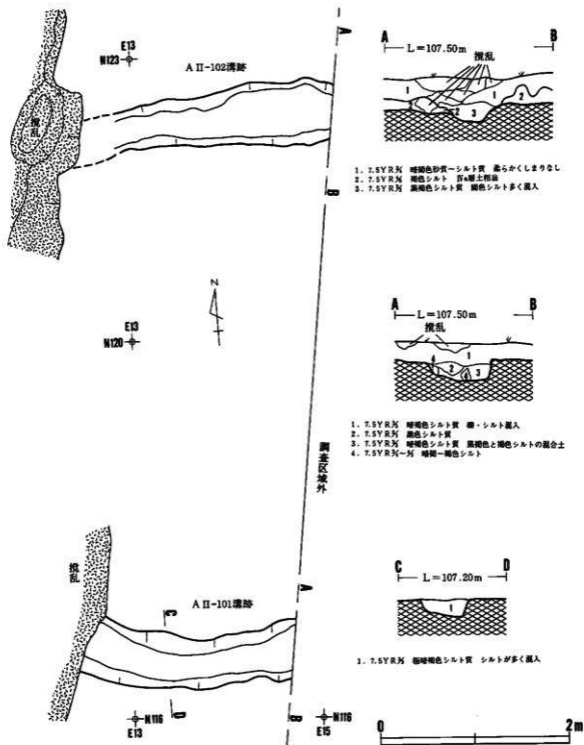


図版40 F I - 103 溝跡

A II - 102 溝跡

(図版41、写真図版37)

本遺構は調査区北端の東側にあり、A II - 101 溝跡の北約6mに位置している。溝はほぼ南北方向に走り、西側が途中で消失し東側が調査区域外へのびている。検出面は褐色シルト層の上面である。検出された部分の規模は長さ2.4m、幅42~62cm、深さ9~16cmである。東側にいくほどに幾分幅広になる。底面は多くの凹凸がある。埋土は主に褐色シルトをブロックで多く混じる黒褐色シルトで占められている。出土遺物はない。

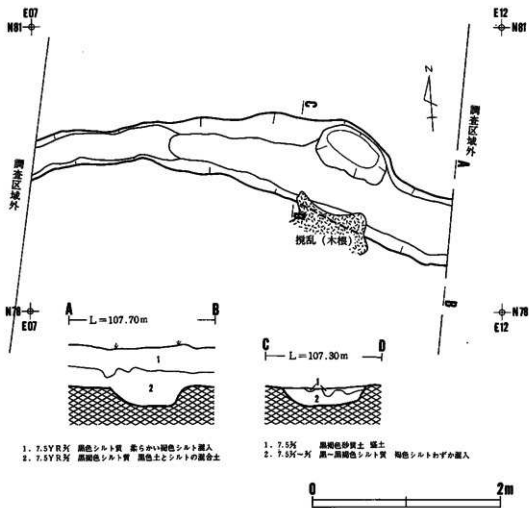


図版41 A II - 101・102 溝跡

B II - 101 溝跡

(図版42、写真図版39)

本遺構は調査区北部東側にありB II - 1号古墳周濠の北側と隣接している。溝は南側にやや湾曲しながら南北に走り両端が調査区域外へ伸びている。南側は一部木根により攪乱を受けている。検出面は褐色シルト層の上面である。溝の幅は36~86cm、中央部東寄り最も広く西端が最も狭い。検出された長さは4.6 mである。深さは5~24cmである。底面は多少凹凸がある



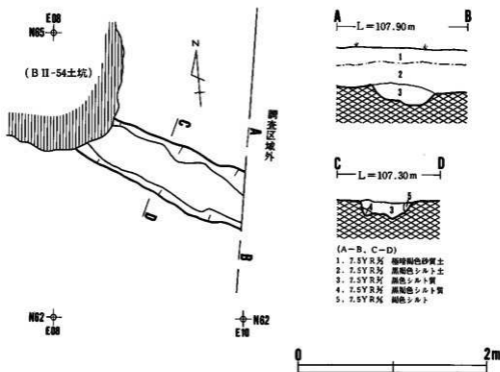
図版42 B II - 101 溝跡

がほぼ平坦である。断面は「U」字形を呈している。埋土は褐色シルトが粒状にわずかに混入している黒褐色～黒色シルトで占められている。出土遺物はない。

B II - 102 溝跡

(図版43、写真図版40)

本遺構は調査区北部東側にありB II - 1号古墳周濠の南10mに位置している。検出面は褐色シルト層の上面である。溝はほぼ南北方向に走り西端がB II - 54土坑に切られ東端が調査区域外へのびている。検出された部分の規模は長さ1.7m、幅50～60cm、深さ7～16cmである。底部径は30～47cmである。底面は大小の凹凸が多くある。埋土断面は「U」字形を呈している。埋土は全体に褐色シルトの小粒が混入し、中～下位に暗褐色シルトがブロック状に混じる黒色シルトで占められている。出土遺物はない。

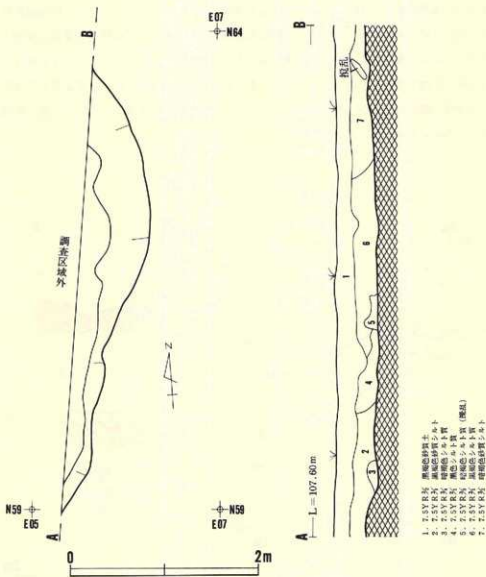


図版43 B II - 102 溝跡

B II - 103 溝跡

(図版44、写真図版41)

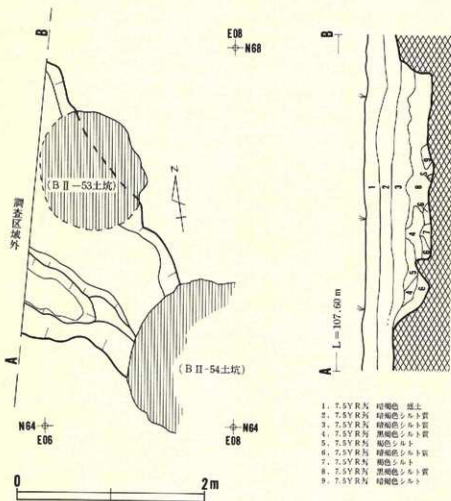
本遺構は調査区北部東側にあり、B II - 5号古墳周濠の北6mに位置している。検出面は褐



図版44 B II - 103 溝跡

色シルト層の上面である。遺構の大半は西側の調査区域外にある。検出された部分の規模は南北径4.51m、東西径0.72m、深さ14~17cmである。底面は大小の凹凸が多くある。東壁面は底面から緩く立ち上がる。南側の埋土は全体に砂が混り炭化物をわずかに混入する黒褐色シルトであり、中央部・北部の埋土は全体に褐色シルトの小粒を混入している黒褐色で占められている。出土遺物はない。

B II - 104 溝跡



図版45 B II - 104 溝跡

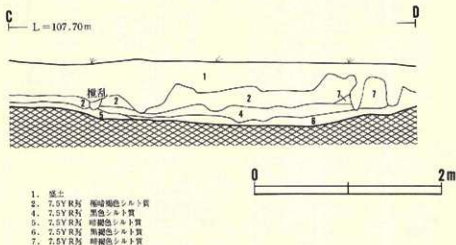
(図版45、写真図版42)

本遺構は調査区北部東側にあり、BⅡ-1号古墳周濠の南6mに位置している。北側をBⅡ-53土坑に、東側をBⅡ-54土坑に切られ、南壁上部を新しい穴によって攪乱を受けている。検出面は褐色シルト層の上面である。溝は北西～南東方向に走り、西側が調査区域外へのび、東側が途中で消失している。検出された部分の規模は長さ1.5m、幅0.7～1m(推定)、深さ31～42cmである。底面は大小の凹凸があり中央部西側が最も深い。埋土は褐色シルトと黒色シルトの混合土で占められている。出土遺物はない。

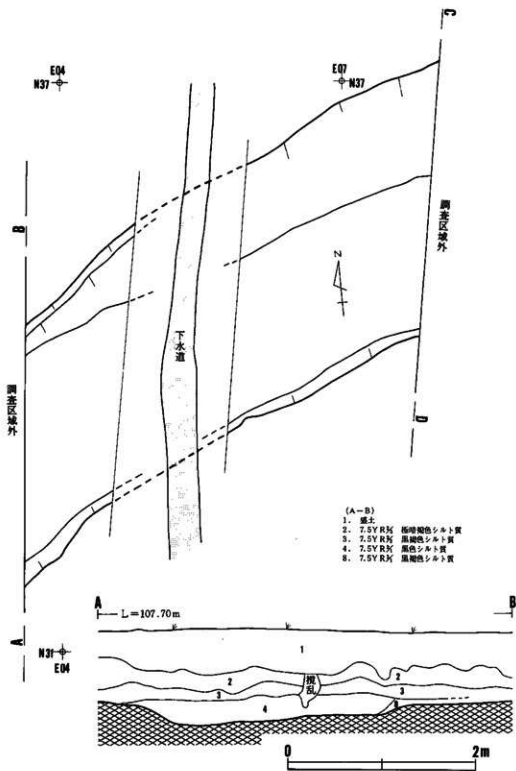
CⅡ-101 溝跡

(図版45、写真図版43)

本遺構は調査区中央部東側にありCⅡ-1号古墳周濠の北13mに位置している。検出面は表土から50～70cm下の暗褐色シルト層の上面である。中央部は現代の下水道によって60cm幅で南北方向に切られている。溝は南西～北東方向に走り、両端が調査区域外にのびる。検出された部分の規模は長さ4.6m、幅2.1～2.4m、深さ5～15cmである。底部は幾分北側が深い。西側の埋土は主に黒色シルトで占められ、東側の埋土は上位に黒色シルト、下位に1～3cm大の円礫が混入している黒褐色シルトで占められている。出土遺物はない。



図版46 CⅡ-101 溝跡(1)



図版47 C II - 101 清肺(2)

C II - 102 溝跡

(図版48、写真図版44)

本遺構は調査区中央部東側にありC II - 1号古墳周濠の北側と隣接している。中央部は南北方向に走る幅60cmの現代の下水道によって切られている。検出面は地表面から50～90cm下の褐色シルト層の上面である。溝はやや南側に湾曲しながら北西～南東方向に走る。両端は調査区域外へのびる。検出された部分の規模は長さ6.2m、幅1.1～1.5m(推定)、深さ9～24cmである。南壁より北壁が急な立ち上がり方をしている。底面は幾分凹凸がある。埋土は下位に褐色シルトを多く混入する暗褐色シルトで占められている。出土遺物はない。

D II - 101 溝跡

(図版49、写真図版45)

本遺構は調査区中央部東側にあり、D II - 1号古墳周濠の北10mに位置している。検出面は褐色シルト層の上面である。南壁の一部が検出されただけで、そのほかは調査区域外にある。検出された部分の規模は長径(北西～南東)2.2m、短径1.2m、深さ22～27cmである。壁面は底面から緩く立ち上がる。埋土は上部が黒褐色シルト、下部が全体に微細な砂を混入する極暗褐色シルトや黒褐色シルトで占められている。出土遺物はない。

E II - 101 溝跡

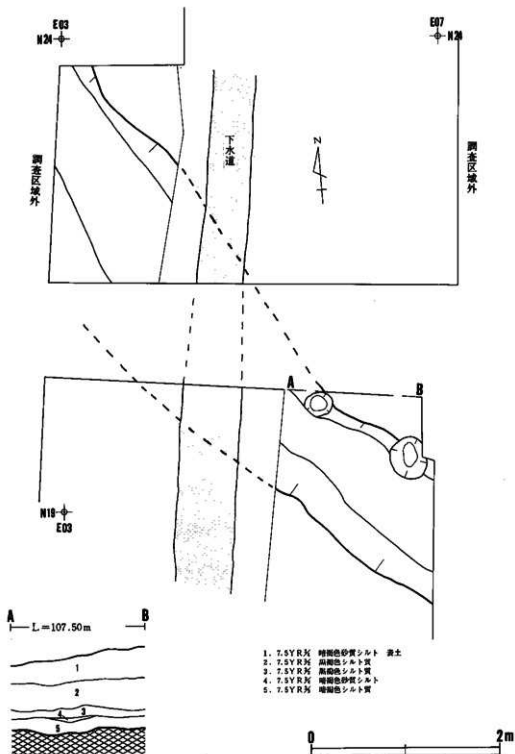
(図版50・51、写真図版46)

本遺構は調査区中央部東側にあり、E II - 2号古墳周濠の南4.5mに位置している。検出面は褐色シルト層の上面である。E II - 102溝跡を切ってつくられ、北壁の一部は攪乱を受けている。溝はほぼ東西方向を走り、両端が調査区域外へのびている。E II - 102溝跡と重複する部分は精査時の掘りすぎにより北壁を消失した。検出された部分の規模は長さ3m、幅2m、深さ23～32cmである。底面は大小の凹凸が多くみられる。埋土は上部が黒褐色シルト、下部が褐色シルトを粒状に混じる黒色シルトで占められている。出土遺物はない。

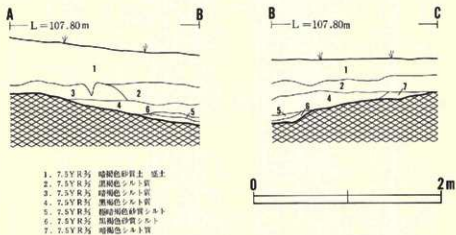
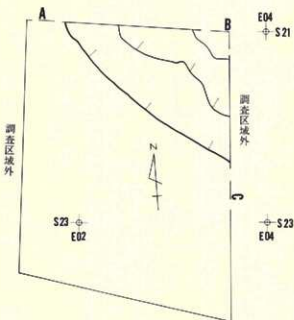
E II - 102 溝跡

(図版50・51、写真図版46)

本遺構は調査区中央部東側にあり、E II - 2号古墳周濠の東側と隣接している。検出面は褐色シルト層の上面である。北側がE II - 103溝、南側がE II - 101溝に切られ、東側の一部が新しい攪乱によって壊されている。溝は南西～北東方向に走り、両端が調査区域へのびる。検出

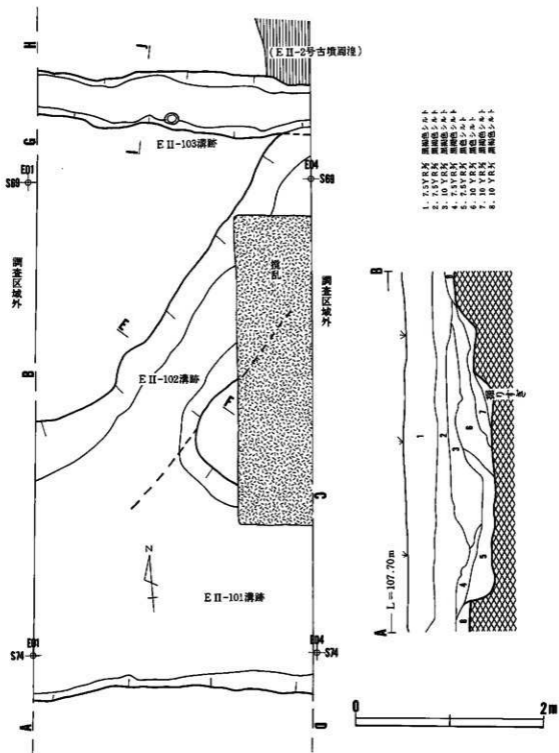


図版48 C II - 102 溝跡

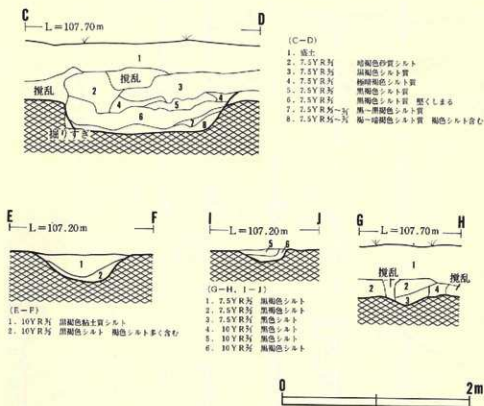


図版49 D II - 101 溝跡

された部分の規模は長さ3.3m、幅91~101cm、深さ26~29cmである。底部幅は46~52cmである。底面は大小の凹凸がある。埋土は下位に褐色シルト粒状に多く混じる黒褐色シルトで占められている。出土遺物はない。



图版50 E II - 101 · 102 · 103 清跡(1)

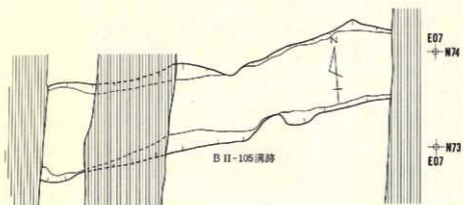


図版51 E II - 101・102・103 溝跡 (2)

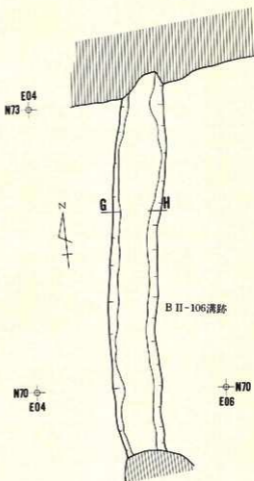
F II - 103 溝跡

(図版50・51、写真図版47)

本遺構は調査区中央部東側にあり、E II - 2号古墳周溝やE II - 102 溝跡を切ってつくられている。検出面は褐色シルト層の上面である。溝は東西方向に走り、両端が調査区域外へのびている。検出された部分の規模は長さ2.9m、幅46~66cm、深さ8~11cmである。底部幅は30~44cmである。底面は凹凸があり平坦でない。埋土は主に上部が垂円礫(径3~6cm)、暗褐色シルトの小粒が混じる黒褐色シルト、下部が黒褐色シルトで占められている。出土遺物はない。



1.10Y R3/2 黒褐色シルト



図版52 B II - 105 ・ 106 溝跡

B II - 105 溝跡

(図版52、写真図版48)

本遺構は調査区北部東側にあり、B II - 1号古墳周濠の北約1.5mに位置している。検出面は褐色シルト層の上面である。B II - 58・59土坑、B II - 106 溝跡を切ってつくられている。西側は南北に走る国道の幅80cmの側溝によって壊されている。溝はほぼ南北方向に走り、西端が調査区外へのび東端が途中で消失している。検出された部分の規模は長さ3.8m、幅76~106cm、深さ10~38cmである。底面はやや北側に傾斜している。埋土は黒褐色シルトで占められている。埋土から外面にハケメ痕をもつ土師器甕形土器の体部小破片(長径1~3cm)が3点出土している。

B II - 106 溝跡

(図版52、写真図版48)

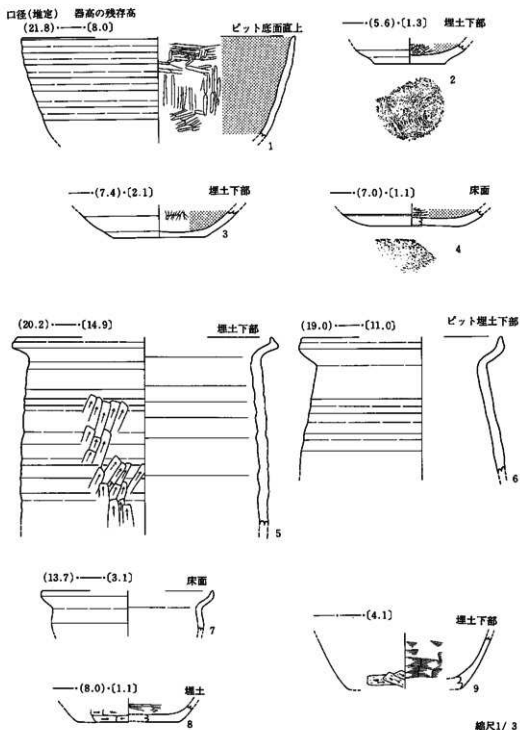
本遺構は調査区中央部東側に、B II - 1号古墳周濠内に位置している。北側がB II - 105溝に、南側B II - 60土坑に切られている。溝はほぼ南北方向に走る。検出されている部分での規模は長さ5.3m、幅44~56cm、深さ10~15cmである。断面は「U」字形を呈する。埋土は小ブロックの褐色シルトが混じる黒褐色シルトで占められている。埋土から鉄滓が検出されている。

V. 遺構外の出土遺物

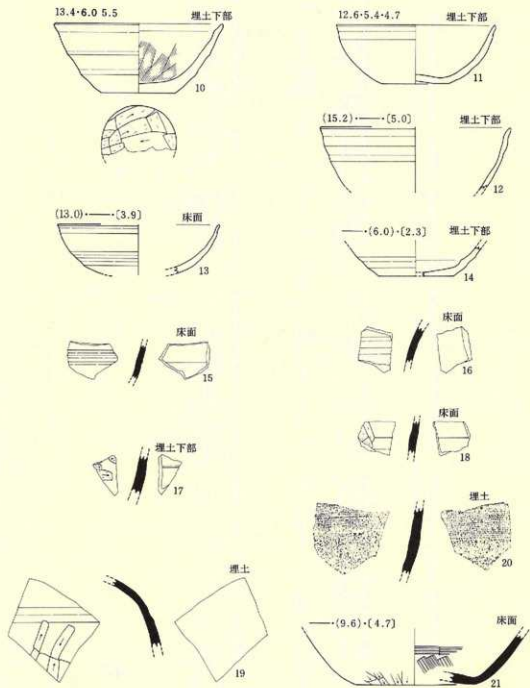
(図版58、写真図版52~54)

須恵器甕形土器(50)、酸化焰焼成の須恵器環形土器(51)、石製品(52、55)、石鎌(53)、切子玉(54)、勾玉(56)、古銭(57~60)が出土している。

50は外面に叩き目痕をもつ体部片である。51はロクロ切り難しが回転糸切りで、再調整のみられないものである。体部が内湾し、口唇部がやや外反する。52、55の用途については不明である。52は扁平で薄く、形状が台形を呈する。55は円形の石製品である。53は長さ3cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm、重さ1.35gのものである。石質はチャートである。54は水晶製の切子玉である。長さ1.9cm、最大幅1.2cm、内孔径0.2cm、重さ1.98gである。孔は片側から穿孔してつくられている。56はメノウ製の勾玉である。長さ3cm、厚さ1.1cm、最大幅1.4cm、孔の外径0.2cm、重さ1.98gである。孔は両側から穿れてつくられている。54、56は共にE II - 2号古墳周辺から出土している。57~60は「寛永通宝」である。

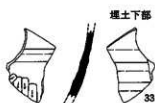
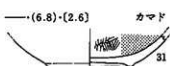
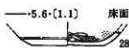
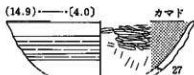
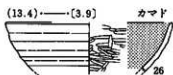
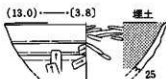
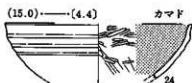
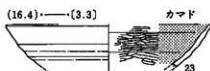
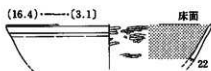


図版53 FI-1住居跡出土遺物(1)



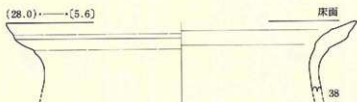
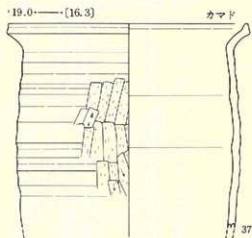
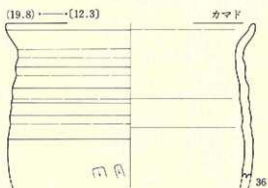
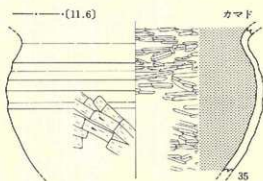
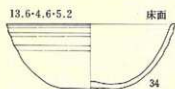
縮尺1/3

圖版54 F I - 1住居跡出土遺物(2)



縮尺1/3

図版55 F I - 2住居跡出土遺物 (1)

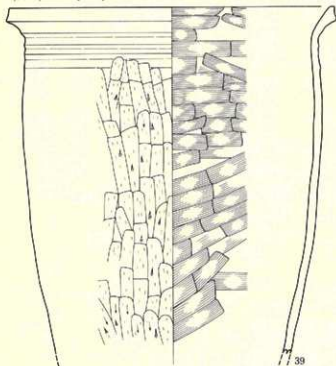


縮尺1/3

図版56 F I - 2住居跡出土遺物 (2)

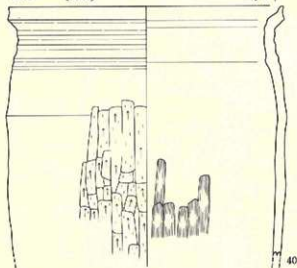
(26.0) ——— (27.6)

燔埋土



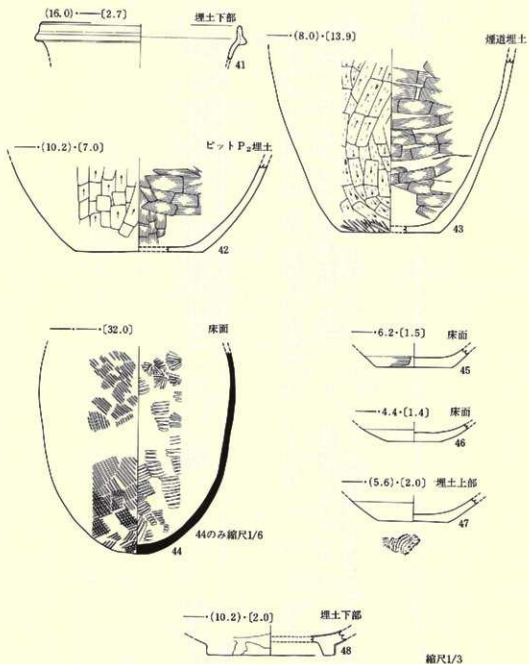
22.0 ——— (20.0)

カマド

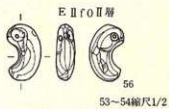
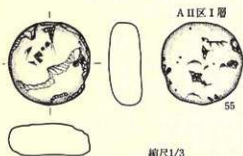
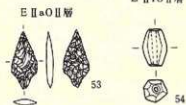
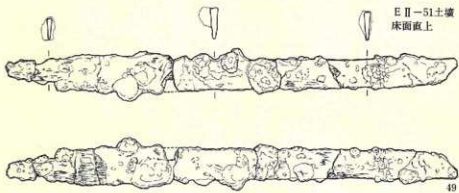


縮尺1/3

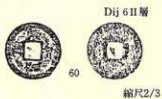
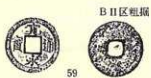
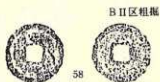
図版57 FI-2住居跡出土遺物(3)



図版 58 F I - 2 住居跡出土遺物 (4)



圖版59 E II-51土壤・遺構外出土遺物



VI ま と め

検出されている遺構は竪穴住居跡2棟、古墳周濠15基、土坑10基、土壇7基、溝跡20条である。出土遺物は勾玉、切子玉、土師器、須恵器、直刀、鉄滓、古銭、石製品、鉄製品などである。

〈竪穴住居跡〉

調査区南端から平安時代の竪穴住居跡が2棟検出されている。2棟とも調査区域外にのびている。FⅠ-1・2住居跡から、土師器では無調整のロクロ使用坏・ロクロ使用の変形土器、須恵器では坏・壺・変形土器・酸化焙焼成の環形土器が出土している。FⅠ-2住居跡出土の須恵器環形土器は回転糸切り痕をもち無調整のものである。底径に対する口径の比も0.39と $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{1}{3}$ に入る。これらの遺物は相原康二氏の土器編年（1981、相原）第Ⅸ群期、高橋信雄氏の土器編年（1982、高橋）Ⅲ-2群に属し、10世紀代に位置づけられると思われる。2棟の新旧関係はFⅠ-2住居跡がFⅠ-1住居跡よりも古いと推定される。これらと同時期の住居跡は紫波町古館橋遺跡、矢巾町淡川遺跡から検出されている。

〈古墳周濠〉

古墳は墳丘がすべて削平されており、周濠によって確認した。調査区の東西幅が約4mと狭いため古墳全体の規模を把握できたものはない。主体部はBⅡ-1号古墳以外すべて調査区域外にある。BⅡ-1号古墳では主体部と推定される位置から主体部を検出することができなかった。削平されていたと思われる。危険ではあるが周濠がほぼ円状に巡るものと仮定して周濠の外径を推定すると、最大はCⅡ-1号古墳で外径13～14m、最小はBⅡ-5・6号古墳の外径5～6mである。外径が推定できた12基のうち、外径10m以上の古墳は4基である。幅は1～2mのものが大半である。深さは7～60cmで、30～50cmのものが多い。周濠の断面は内側の壁が外側の壁より急な角度で立ち上がるタイプと緩い「U」字形のタイプとがある。昭和59年に矢巾町教育委員会が伏森古墳群遺跡を調査し検出した11基には周濠の南側が踏切れるタイプとそうでないタイプがあることが確認されている。BⅡ-1号古墳は周濠が南側で踏切れるタイプである。

古墳周濠15条からはほとんど遺物は出土していない。僅かにBⅡ-1号古墳周濠の埋土から外面にハケメ、内面にナダ調整された土師器変形土器の小破片が数点出土しているだけである。矢巾町教育委員会が調査した5号古墳の主体部からは勾玉60個、管玉7個、切子玉8個、算盤玉2個、ガラス玉約1230個の玉類、14号古墳からは須恵器平瓶、刀類などが出土している。矢巾町教育委員会の発掘調査で出土した遺物から、今回検出された古墳も7世紀後半～8世紀代

にかけて築造されたと推定される。

伏森古墳群遺跡は過去2回にわたる発掘調査で13基、現存する古墳1基、今回の調査で15基と限られた狭い範囲で29基確認された。このことから、本遺跡はかなり高い密度で古墳が分布する大規模な古墳群遺跡であることが判明した。

県内の末期群集墳は古墳主体部が積石式のものとならずに土壇のもの（土壇・礎床・石囲い）とがある。従来、前者は江釣子村八幡・猫谷地・五条丸古墳群・花巻市熊堂古墳群・盛岡市太田蝦夷森古墳群など盛岡以南の北上川中流域西部の低位段丘で古代の城柵あるいは開拓拠点の近くに立地、後者は西根町谷助平古墳、岩手町浮島古墳、二戸市堀野古墳など盛岡以北の北上川上流域および馬淵川流域の丘陵、台地、沖積地に立地し古墳群の規模も小さいとされてきた。

昭和59年に本遺跡の古墳主体部を調査した矢巾教育委員会の西野修氏の御教示によると、主体部4基はいづれも土壇（うち1基礎床）であるという。しかも、前述したごとく段丘北東部の限られた範囲の調査で28基、西に遺存する1基を合わせて29基の古墳が確認され、密度が高いことからその数は100基近くに及ぶものと予想されている。

従って、本遺跡は古墳の主体部が土壇である点で盛岡以北の古墳群に類似し、立地（低位段丘）、位置（徳丹城の近く）、古墳の数で盛岡以南の古墳群に一致し、従来の古墳群遺跡とは異なった性格をもつ遺跡であることがわかり、古代東北の蝦夷や開拓を考える上で重要な手掛を与えると同時に新たな問題を提起したと思われる。

古墳の規模一覧表

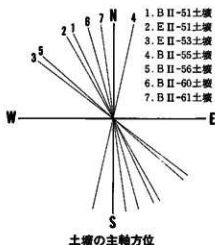
	古墳名	構出きの長さ 周溝の長さ	周溝の幅	周溝の深さ	周溝の底部径	推定される 種別	構出された 周溝の位置
1	BⅠ-1号古墳	3.2 m	1.44~1.56 m	14~27 cm	0.63~1.2 m	8~9 m	南西側
2	DⅠ-1号古墳	3.1	1.8~2.0	44~61	0.64~0.86	8~9	北西側
3	DⅠ-2号古墳	2.1	1.4	40	0.44~0.50	5~6	南西側
4	DⅠ-3号古墳	2.1	-	51~59	0.92~1.32	5~6	北東側
5	EⅠ-1号古墳	2.9	1	7~51	-	-	南東側
6	BⅡ-1号古墳	7.4	1.1~1.4	26~28	0.48~0.76	5~6	南側・東側
7	BⅡ-2号古墳	6.2	1.52~1.70	10~45	1.09~1.24	10~11	西側
8	BⅡ-3号古墳	5	1.10~1.30	12~26	0.9~1.11	-	西側
9	BⅡ-4号古墳	-	-	30	-	7~8	西側
10	BⅡ-5号古墳	3.7	0.50~0.55	3~11	0.24~0.45	5~6	北東側
11	CⅡ-1号古墳	1.5	1.36~1.64	12~50	0.36~1.22	13~14	東側
12	DⅡ-1号古墳	1.7	1.77~2.31	39~60	0.42~0.80	11~12	北側
13	EⅡ-1号古墳	-	1.3	28~50	1.06	-	北側
14	EⅡ-2号古墳	-	-	44	-	6~7	西側
15	EⅡ-3号古墳	1.3	1.92~2.14	36~41	1.58~1.98	10~11	南側

〈土壌〉

7基が検出されている。平面形は隅丸の長方形である。規模は長径0.78~1.98m、短径が0.46~0.82mである。深さは10~49cmである。長径が1m未満のものが2基、1~1.5m未満のものが2基、1.5~2m未満が2基、不明が1基である。主軸方位は北西-南東が6基、北-南が1基である。矢巾町教育委員会で調査した土壌(SK04)1基も主軸方位が北西-南東である。

出土遺物はEⅡ-51土壌から直刀1点が出土したのみである。埋土をふるいにかけて調べたが玉類などの遺物は検出されなかった。前述のSK04土壌からは直刀1点、刀子1点が検出されている。BⅡ-51土壌の埋土中には多くの炭化物が混じっていた。

BⅡ-60・61土壌はBⅡ-1号古墳の周縁に切られている。また、BⅡ-55・56土壌はBⅡ-1号古墳、EⅡ-51土壌はEⅡ-1号古墳、EⅡ-53土壌はEⅡ-3号古墳と隣接している。このことから、近隣する土壌と古墳とはある程度の時間差が考えられる。新旧関係についてはBⅡ-60・61土壌がBⅡ-1号古墳より古いほかは出土遺物が少ないため両者の時期が不明である。



〈土坑〉

10基検出されている。平面形は隅丸方形、不整な方形、方形、不整な台形などの方形を基調とするもの4基、不整な楕円、円、細長い円などの円形基調とする3基、不整形が1基、不明が2基である。他の遺構との新旧関係が明らかなものは、BⅡ-1号古墳(旧)→BⅡ-52土坑(新)、BⅡ-104溝跡(旧)→BⅡ-53土坑(新)、BⅡ-102溝跡(旧)→BⅡ-54土坑(新)、EⅡ-52土坑(旧)→EⅡ-54土坑(新)、BⅡ-58・59土坑(旧)→BⅡ-105溝跡(新)の5例である。BⅡ-54土坑は馬の蹄鉄などの鉄製品が出土していることからかなり新しい時代の土坑である。そのほかの土坑の時期は出土遺物がないためほとんど不明である。

〈溝跡〉

20条検出されている。幅の長さから次のように分けられる。最大幅が1m未満のもの(A)13条、1~2m未満のもの(B)4条、2m以上のもの(C)2条、不明1条である。Aの溝

で走る方向が南北のもの7条、東西のもの6条、Bの溝で北西—南東、東西、北東—南西のもの各1条、C溝で東西、北東—南西のもの各1条である。

Aの溝では南北または東西方向に走るもので占められている。BⅠ—101溝はBⅠ—1号古墳周濠を、FⅠ—102・103溝は平安時代に竪穴住居跡を切ってつくられている。しかし、出土遺物がないことや時期の判明している遺構に切られていないことから時期を決定することができない。FⅠ—101溝はFⅠ—102溝に、BⅡ—104溝はBⅡ—53土坑に切られているが、両遺構からの出土遺物がないため時期は不明である。BⅡ—106溝は奈良または奈良以前の土壌に切られていることから、古い溝であるといえる。そのほかの溝は出土遺物がないため時期は不明である。

参考引用文献

- 相原康二 1981『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書—X— 岩手県文化財調査報告書第59集』岩手教育委員会
- 高橋信雄 1982「古代」『岩手の土器』岩手県立博物館
- 朴沢正耕 1979「古館橋遺跡」『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書—Ⅲ— 岩手県文化財調査報告書第35集』岩手県教育委員会
- 沼山源喜治 1976「陸奥北半における末期群集墳の性格」『北奥古代文化』第8号
- 岩手県埋蔵文化財センター 1985『岩手の遺跡』
- 矢巾町教育委員会 1986『渋川遺跡』現地説明会資料
- 高橋信雄・赤沼英男 1986「岩手の古代鉄器に関する検討—自然科学的手法による古代鉄器の調査—」『岩手県立博物館研究報告』第4号
- 岡田茂弘・桑原滋郎 1974「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」『研究紀要Ⅰ』宮城県多賀城跡調査研究所

狹森古墳群遺跡出土の火山灰の蛍光X線分析

奈良教育大学 三 辻 利 一

1. 分析方法

火山灰試料は空気乾燥の中で、120℃で5時間乾燥したのち、タングステンカーバイド製乳針で100～200メッシュ程度に粉砕した。粉末試料は約15トンの圧力を加えて固め、コイン状の錠剤を作成した。この錠剤試料にX線を照射し、発生する蛍光X線を理学電機製エネルギー分散型蛍光X線分析装置で測定した。定量分析には、岩石標準試料JG-1を標準試料として使用した。分析値は、JG-1による標準化値で表示した。

2. 分析結果

図1のRb-Sr分布図より、十和田系火山灰であることが確認される。つぎに、十和田系火山灰のうち、十和田a火山灰、十和田b火山灰、二ノ倉火山灰の相互識別には、K-Ca分布図が有効である。

図2にはK-Ca分布図を示す。明らかに十和田a火山灰領域に分布する。また、Fe因子も十和田a火山灰に対応したことから、K、Ca、Fe、Rb、Srの全因子で十和田a火山灰に対応したことになり、十和田a火山灰と推定された。

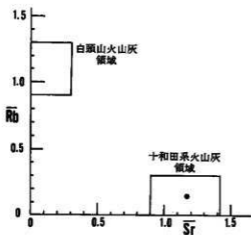


図1 狹森古墳群遺跡出土火山灰のRb-Sr分布図

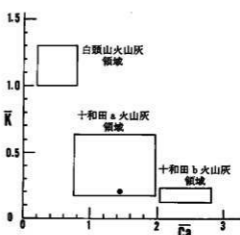


図2 狹森古墳群遺跡出土火山灰のK-Ca分布図

狹森古墳群遺跡出土直刀の金属学的解析結果

岩手県文化振興事業団 博物館 赤沼英男

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターから、狹森古墳群遺跡出土の直刀について金属学的な解析の依頼を受けた。狹森古墳群は7C後半から8C代に位置すると考えられており、同古墳群より出土した鉄器の材質と製作技法を明らかにすることは、同時期における東北地方北部の古代製鉄技術を解明するうえできわめて重要である。調査は継続中であるが、以下にこれまでの結果について報告する。

1. 調査試料及び調査方法

試料鉄器は図1に示す直刀である。赤錆化が進みいくつか切断されているものの製作時の形態をよくとどめている。

調査試料採取位置は図1のA部である。採取した試料は2分し一方は化学成分分析用に、他方は樹脂に埋め込み十分研磨した後組織観察に供した。なお、化学成分の分析には極力黒錆部を用い、結合誘導プラズマ法(ICP法)により行った。また、組織観察用試料の研磨にあたっては、試料の膨潤及び崩壊防止のため水を一切使用しない方法をとった。

2. 調査結果並びに考察

図2は直刀の断面マクロ組織である。断面中央部はFe分がイオン化し外部に流出したためそのほとんどが失われている。わずかに刃先部と皮金部を残すだけである。

比較的残存状態の良い部分(図2のAからD部)を高倍で観察したものが図3のaからdである。いずれも内部に白色、または微小な黒点群からなる網目状組織を確認することができる。白色をした結晶は、もとの健全な鋼中におけるパーライト相のうちフェライト相が錆化によって失われセメントタイトのみが残ったものである。一方、微小な黒点群からなる網目状組織はセメントタイトが欠落して生じた組織であろう。また、これらの組織によって囲まれる黒錆層の小領域はもとのフェライト相に対応する。錆化による結晶の膨脹を無視すれば図3-a及びbはフェライト結晶の大きさが15-20 μ となる。さらに白色結晶及び微小な黒点群が占める領域をもとの鋼のパーライト相とすれば、これらはいずれも炭素含有量が0.1-0.2%と評価される。フェライト結晶が比較的小さいことから、この直刀の刀先から刀身断面中央の皮金部はパーライト変態点以上の高温領域から比較的是やい速度で冷却された軟鋼によって構成されていたものと考えられる。

図3-c及びdは棟部の代表的な組織である。図3-cはa及びbと同様炭素含有量が0.2%程度、図3-dは内部にフェライト結晶を読みとることができないことから、炭素含有量が0.6-0.7%に対応する組織と推定される。いずれの組織も熟処理の跡を読みとることはで

きない。棟部はパーライト変態点以上の高温領域からゆるやかに冷却された軟鋼と炭素含有量の比較的高い硬鋼によって構成されていたことがわかる。

刀身断面中央部の大半が鉄分の流出によって失われているため、製刀法について詳細に検討することは困難であるが、これらの観察結果から少なくともこの直刀は炭素含有量が0.6~0.7%程度の硬鋼と0.1~0.2%程度の軟鋼による合せ鍛えの構造をとっていたことを指摘できる。

鋼中に残存する介在物は非常に少なく、刀身断面中央から棟部にかけてウスタイト主体あるいはファヤライトが珪酸塩質のガラスに包み込まれたタイプのものが確認されるにすぎない。チタン鉱物を含む介在物が存在しないことから、原料は鉱石であり、製刀に当たっては比較的清純な鋼が使用されたものと考えられる。

表1は鍔片の化学成分分析結果である。鉄は錆化の過程で酸素と水素分を増し、Fe分の含有量は減ずる。従ってもとの鋼中の化学組成を推定するためには対Fe比をとって検討する必要がある。表1には上段に分析値を、また対Fe比を下段に示している。この表に従えば砂鉄の標識成分であるTiは0.005%と低い値をとる。またCa、Mgといった介在物成分も少ない。一方、鉱石の標識成分であるCuは、0.185%と極めて高い値を示している。この分析結果から、使用原料は含銅磁鉄鉱であり、作刀にあたっては不純物の少ない鋼が使用されたものと推定される。先の組織観察の結果とよく一致する。なお、Siが0.253%と他に比べ高い値をとるが、試料の錆化の状態を考え合わせれば、これは粘土や土砂による汚染の影響と判断される。

東北地方北部より出土した鉄器の調査で含銅磁鉄鉱の使用が確認された初めての例である。この直刀に使用された地金は大陸から輸入された可能性がきわめて高い。

蕨手刀を始めとする鉄器の自然科学的調査の結果、8Cには東北地方北部でも砂鉄の使用が確認されている¹⁾。今回調査した直刀は7C後半~8C代のものと推定される。これらの結果を総合すれば7C後半から8C前半が東北地方における製鉄技術上の大きな移行期とみることができ。今後同古墳及び同時期の遺跡から出土した数多くの鉄器の調査を進めることにより、この時期の製鉄技術の変遷をより明確にすることができるであろう。

表1 直刀の化学組成

T. Fe	Cu	Mn	Ti	Ca	Si	Mg
61.553	0.114	0.002	0.003	0.016	0.156	0.004
	0.185	0.003	0.005	0.026	0.253	0.006

参考文献

- 1) 高橋信雄・赤沼英男 1984「蕨手刀からみた東北北部の古代製鉄技術」『季刊考古学』8号P27-33
高橋信雄・赤沼英男 1985「岩手の古代鉄器に関する検討(3)」『岩手県立博物館研究報告3号』P1-8



図1 調査資料

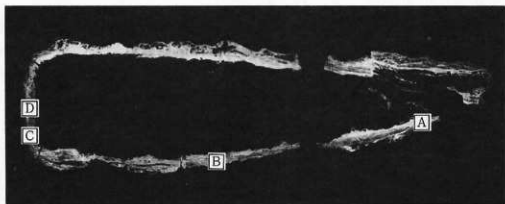


図2 刀身断面マクロ組織

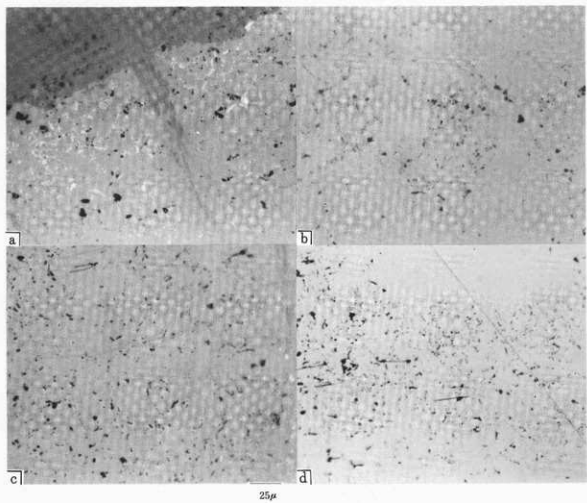


図3 黒錆層中の残留セメタイト及びフェライト結晶組織

写真図版



a. 調査前の遺跡現況西側 (B I 区)



b. 調査前の遺跡現況西側 (D・E I 区)



a. 調査前の遺跡現況東側 (CⅡ区)



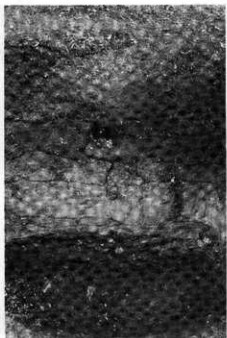
b. 調査前の遺跡現況東側 (D・EⅡ区)



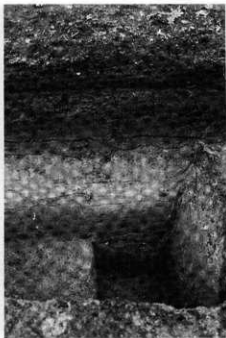
a. 粗掘作業状況東側 (BⅡ区)



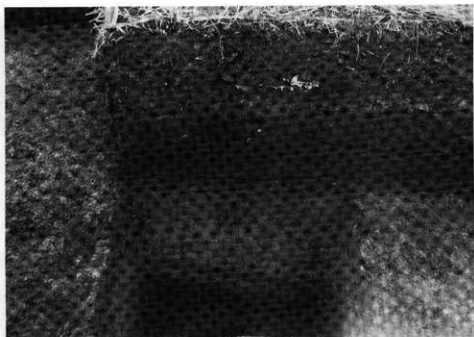
b. 遺構検出作業状況東側 (A・BⅡ区)



a. 東側No.2深掘 (土層断面)



b. 西側No.2深掘 (土層断面)



c. 西側No.1深掘 (土層断面)



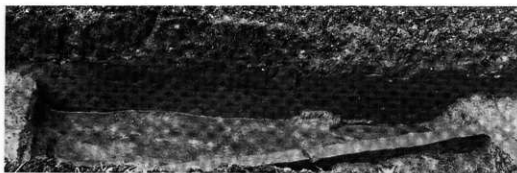
a. F I-1 住居跡 (埋土断面No. 1)



b. F I-1 住居跡 (埋土断面No. 2)



a. F I-2 住居跡 (平面)



b. F I-2 住居跡 (埋土断面No. 2)



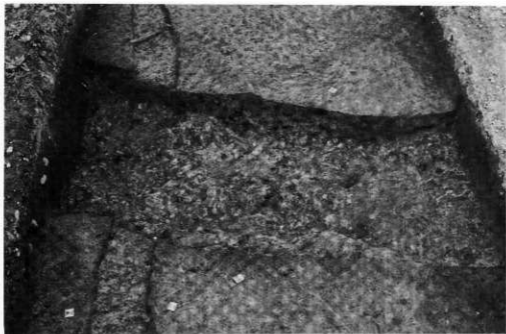
a. FI-2住居跡カマド (平面)



b. FI-2住居跡カマド (埋土断面)



c. FI-2住居跡カマド (右袖断面)



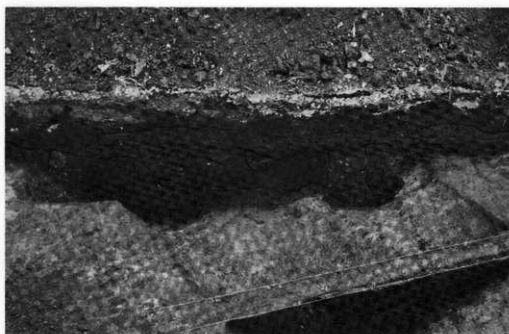
a. BI-1号古墳 (平面)



b. BI-1号古墳周濠 (掘土断面No.2)



a. D I-1号古墳 (平面)



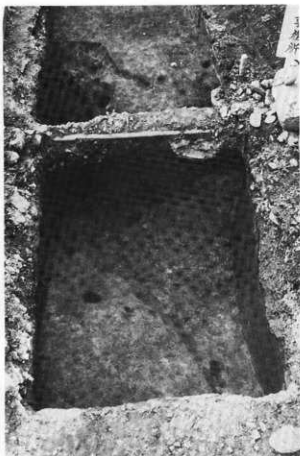
b. D I-1号古墳周濠 (埋土断面No.1)



a. D I-2号古墳 (平面)



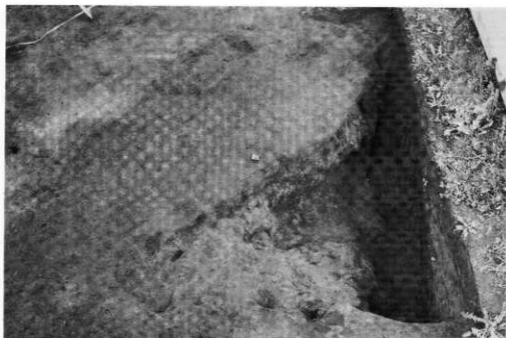
b. D I-2号古墳周濠 (埋土断面No.1)



a. D I-3号古墳 (平面)



b. D I-3号古墳周溝 (埋土断面No.2)



a. E I-1号古墳 (平面)



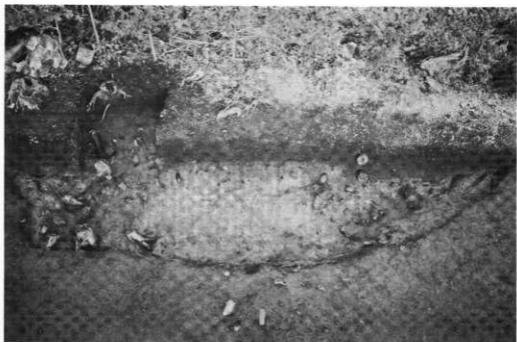
b. E I-1号古墳周溝 (埋土断面No.2)



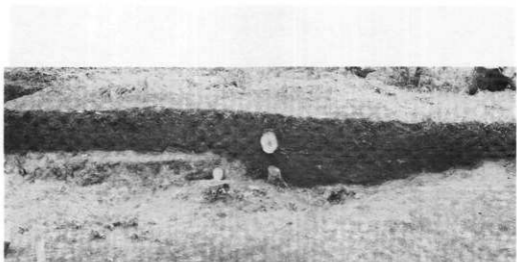
a. B II-1号古墳 (平面)



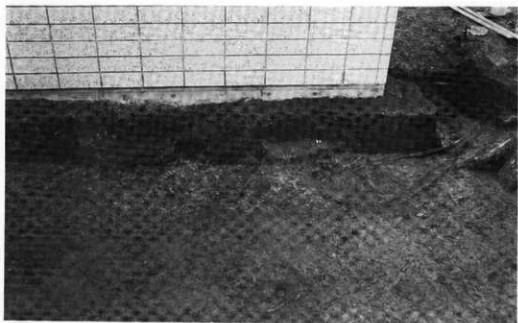
b. B II-1号古墳周濠 (埋土断面No. 2)



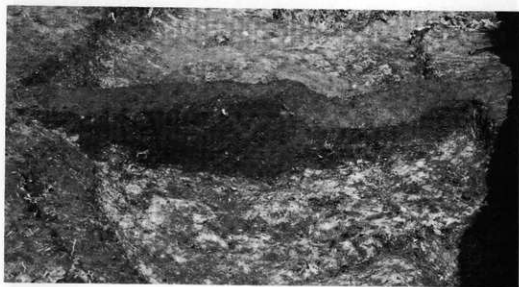
a. B II-2号古墳 (平面)



b. B II-2号古墳周溝 (埋土断面No. 2)



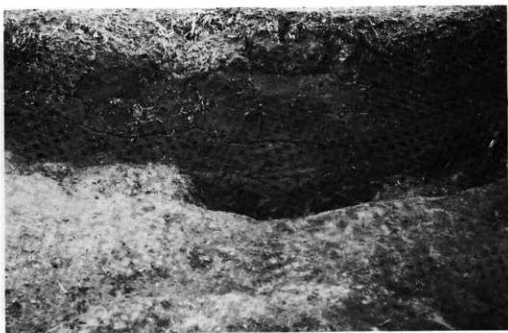
a. B II-3号古墳 (平面)



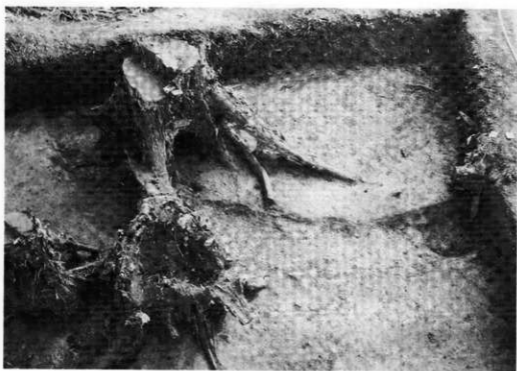
b. B II-3号古墳周濠 (埋土断面No. 1)



a. B II-4号古墳 (平面)



b. B II-4号古墳岡渡 (埋土断面)



a. B II-5号古墳 (平面)



b. B II-5号古墳周濠 (埋土断面)



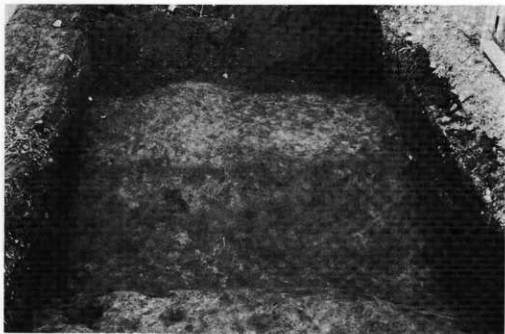
a. C II-1 号古墳 (平面)



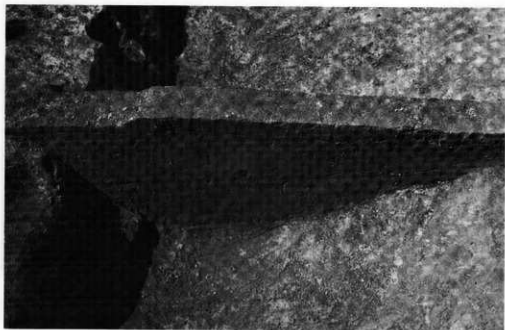
b. C II-1 号古墳周溝 (埋土断面No. 1)



c. C II-1 号古墳周溝 (埋土断面No. 3)



a. D II-1号古墳 (平面)



b. D II-1号古墳周濠 (埋土断面)



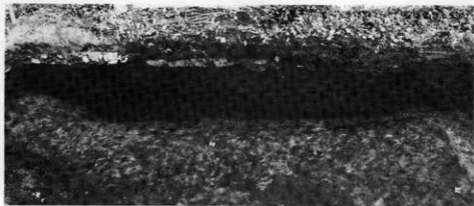
a. E II-1号古墳 (平面)



b. E II-1号古墳周濠 (埋土断面)



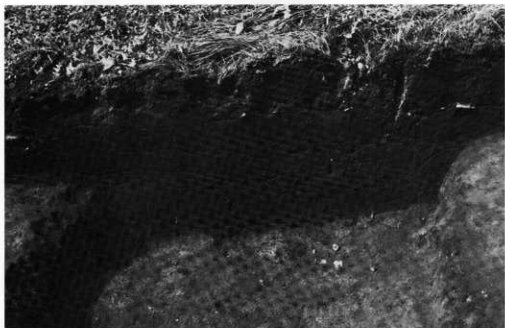
a. E II-2号古墳 (平面)



b. E II-2号古墳周溝 (埋土断面)



a. E II-3 号古墳 (平面)



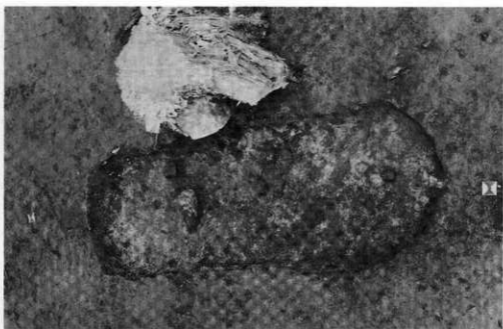
b. E II-3 号古墳周濠 (埋土断面)



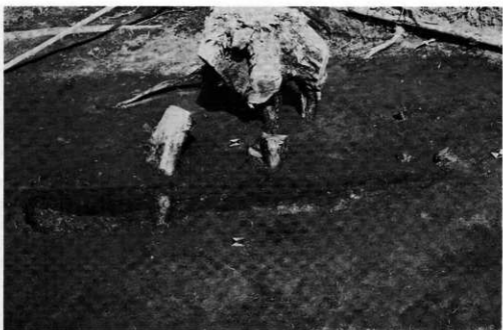
a. E I-51土坑 (平面)



b. E I-51土坑 (埋土断面No. 3)



a. B II-51土墳 (平面)



b. B II-51土墳 (埋土断面No. 1)



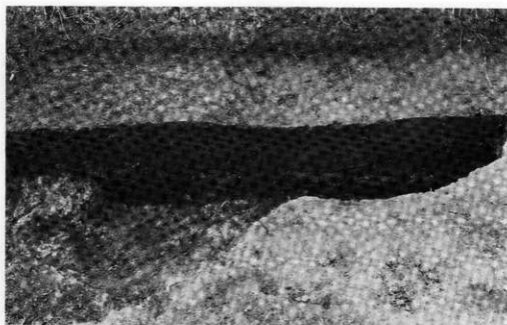
a. B II-52土坑 (平面)



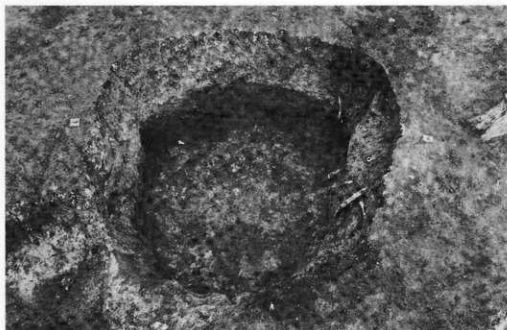
b. B II-52土坑 (埋土断面)



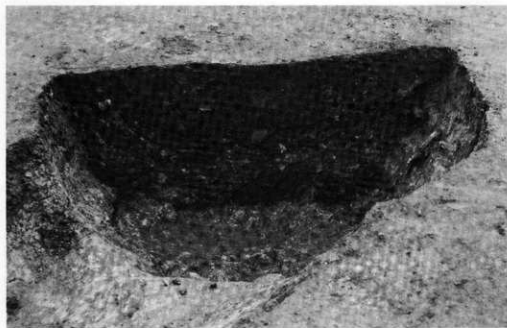
a. B II-53土坑(左) B II-54土坑(右)(平面)



b. B II-53土坑(右) B II-104溝跡(左)(埋土断面)



a. B II-54土坑 (平面)



b. B II-54土坑 (埋土断面)



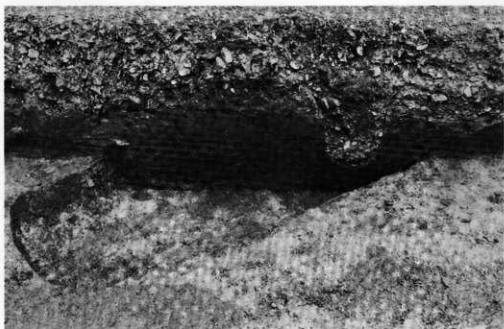
a. D II-51土坑 (平面)



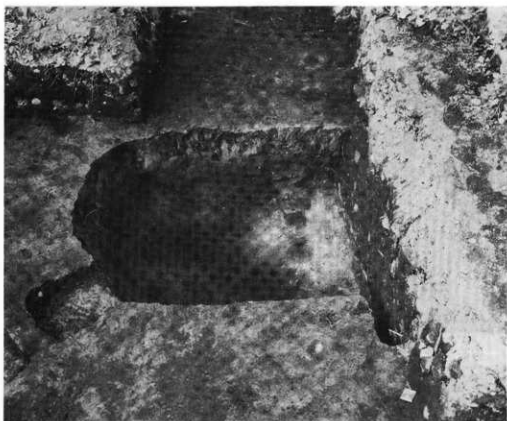
b. D II-51土坑 (埋土断面No. 1)



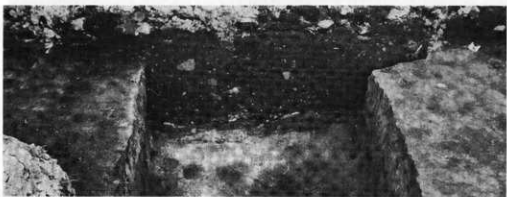
a. E II-51土坑 (平面)



b. E II-51土坑 (埋土断面)



a. E II-52·53土坑 (平面)



b. E II-54土坑 (埋土断面)



a. E II-53土壤 (平面)



b. E II-53土壤 (埋土断面)



a. B I-101溝跡 (平面)



b. B I-101溝跡 (埋土断面No.5)



c. B I-101溝跡 (埋土断面No.6)



a. B I-102溝跡 (平面)



b. B I-102溝跡 (埋土断面No.1)



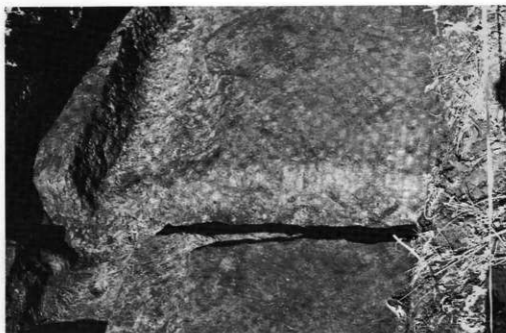
c. B I-102溝跡 (埋土断面No.2)



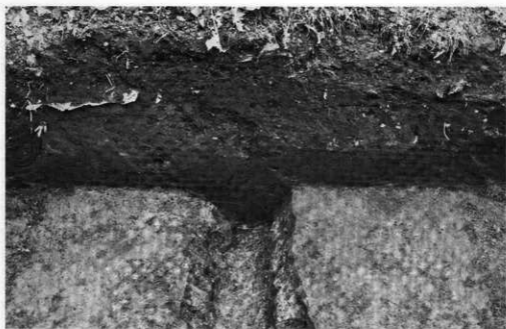
a. DI-101溝跡 (平面)



b. DI-101溝跡 (埋土断面)



a. F I-101溝跡 (平面)



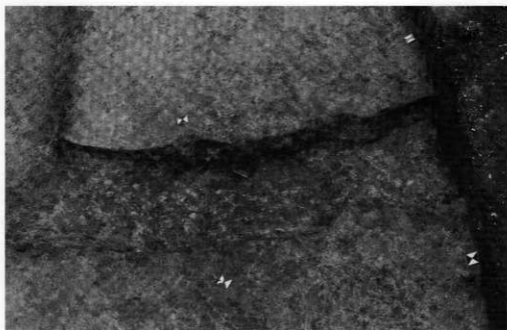
b. F I-101溝跡 (埋土断面)



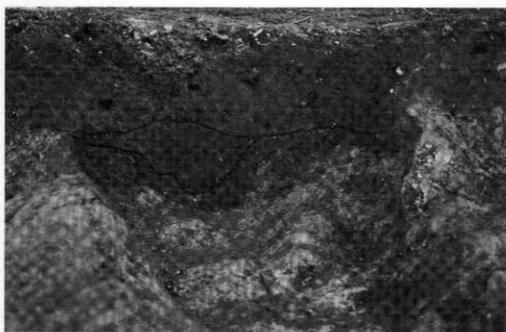
a. F I-102溝跡 (平面)



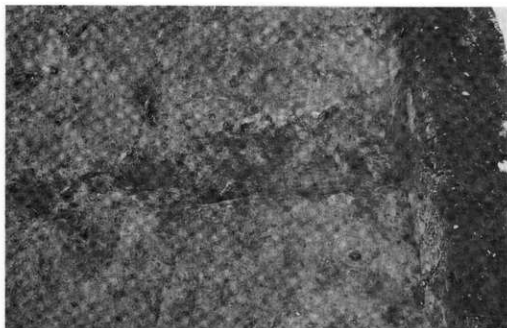
b. F I-102溝跡 (埋土断面No. 4)



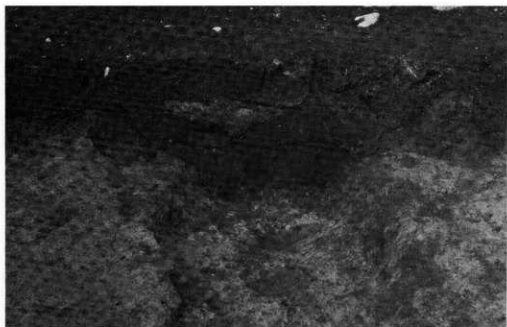
a. A II-101溝跡 (平面)



b. A II-101溝跡 (埋土断面No.1)



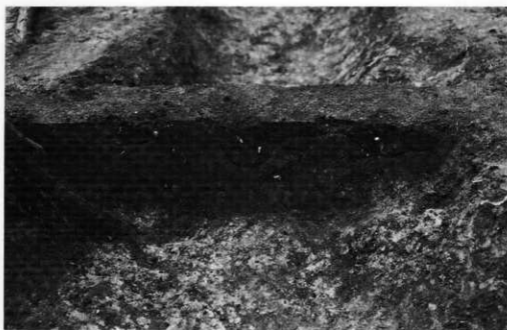
a. A II-102溝跡 (平面)



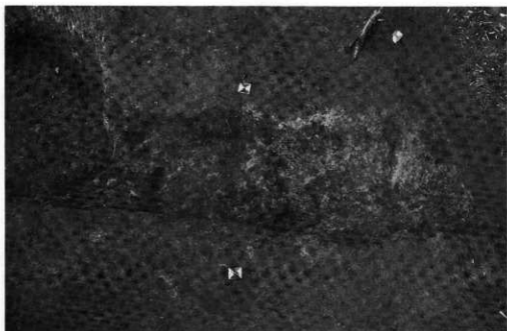
b. A II-102溝跡 (埋土断面)



a. B II-101溝跡 (平面)



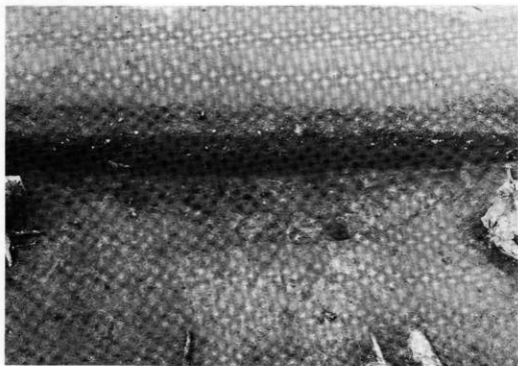
b. B II-101溝跡 (埋土断面No. 2)



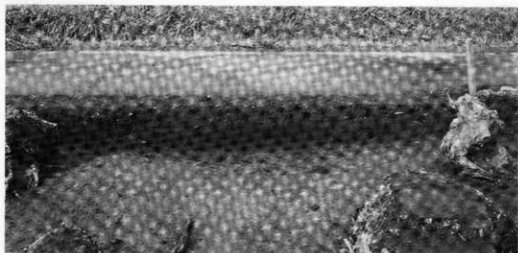
a. B II-102溝跡 (平面)



b. B II-102溝跡 (埋土断面No. 2)



a. B II-103清跡 (平面)



b. B II-103清跡 (樹土断面)



a. B II-104清跡。B II-53土坑 (平面)



b. B II-104清跡 (埋土断面)



a. C II-101溝跡 (平面)



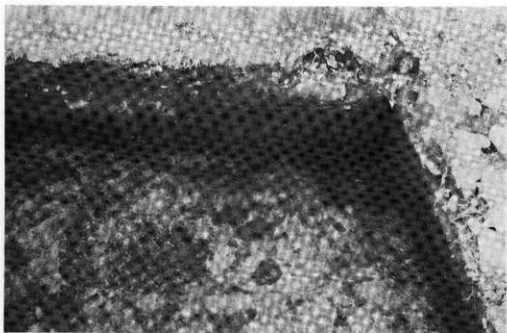
b. C II-101溝跡 (埋土断面No.1)



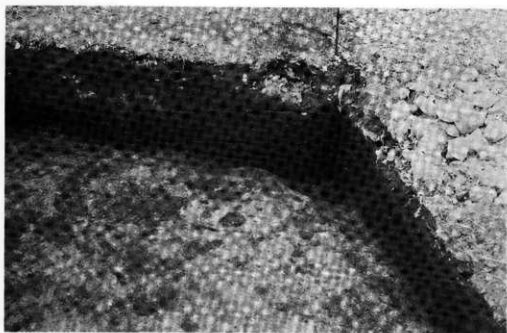
c. C II-101溝跡 (埋土断面No. 2)



d. C II-102溝跡 (平面)



d. D II-101溝跡 (平面)



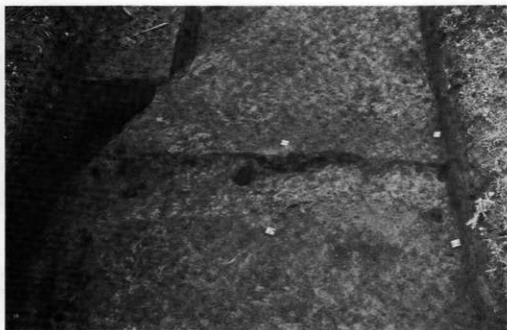
b. D II-101溝跡 (埋土断面No. 2)



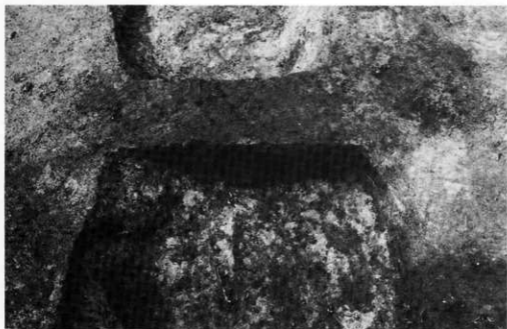
d. E II-101-102清跡 (平面)



b. E II-101-102清跡 (埋土断面No. 2)



d. E II-103;溝跡 (平面)



b. E II-103;溝跡 (埋土断面No. 2)



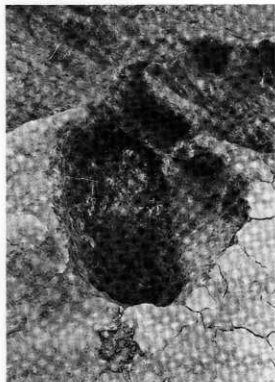
a. B II-106溝跡 (平面)



b. B II-105溝跡 (平面)



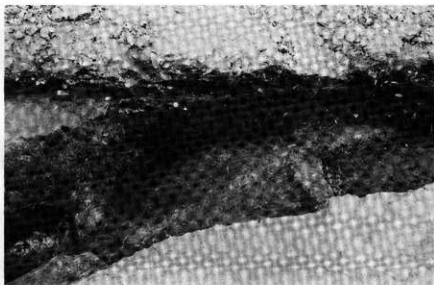
c. B II-55~59土竈・土坑, B II-105溝跡 (平面)



a. B II-55-56土塊 (平面)



b. B II-60-61土塊 (平面)



c. B II-61土塊 (塊土断面)



1



2



3



4



5



6



7



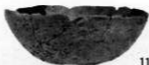
8



9



10



11



12



13



14



15



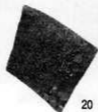
16



17



18



20



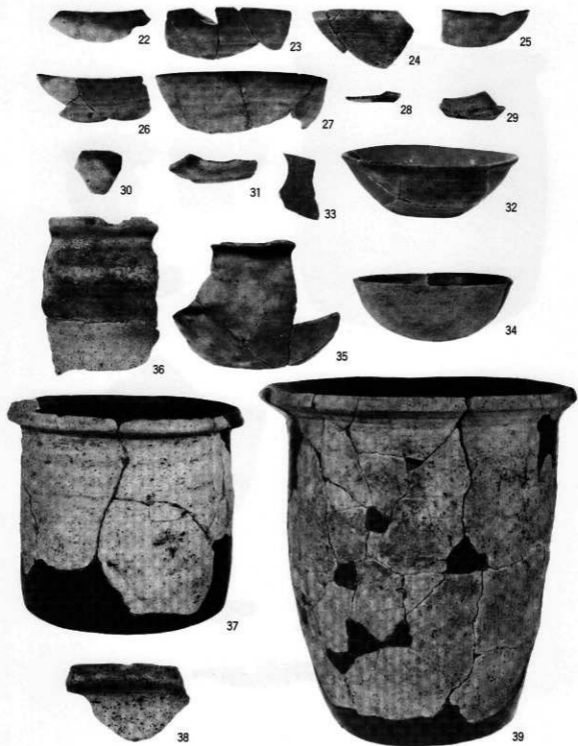
19



21



縮尺1/3



縮尺1/3

写真図版51 F1-2住居跡出土遺物(1)



44のみ
縮尺1/6



縮尺1/3



50



51

50・51 縮尺1/3



52



53



54



56



55



57



58



59



60

縮尺1/2

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

	所 長	及 川 昌 二
	副 所 長	宮 英 一
〔管理課〕	課 長	千 葉 久 夫
	課 長 補 佐	阿 部 詔 夫
	主 事	立 花 多加志
	運転技士兼技能士	佐 藤 春 男
〔調査課〕	課 長	昆 野 靖
	主任文化財専門調査員	工 藤 利 幸
	◇	高 橋 与右工門
	文化財専門調査員	菊 池 利 和
	◇	渡 辺 洋 一
	◇	田 鎖 寿 夫
	◇	佐々木 嘉 直
	◇	平 井 進
	◇	中 村 良 一
	◇	田 村 壮 一
	◇	光 井 文 行
	◇	玉 川 英 喜
	◇	石 川 長 喜
	◇	中 川 重 紀
	◇	高 橋 義 介
	◇	酒 井 宗 孝
〔資料課〕	課 長	名須川 滋 男
	主任文化財専門調査員	三 浦 謙 一
	文化財専門調査員	佐々木 清 文

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第 113 集

狹森古墳群遺跡発掘調査報告書

国道 4 号拡幅工事関連遺跡発掘調査

印刷 昭和61年11月25日

発行 昭和61年11月30日

発行 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 紫波郡都南村大字下飯岡 11-185

電話 (0196) 38-9001~2

印刷 株式会社 熊谷印刷

〒020 盛岡市上田一丁目 6-49

電話 (0196) 53-4151